HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中世におけるウッドストックとその近辺
Author(s)	小川, 晃一
Citation	北大法学論集, 21(1), 1-67
Issue Date	1970-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/27890
Type	bulletin (article)
Note	論説
File Information	21(1)_P1-67.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論説

中世における ウッドストックとその近辺

小川晃一

一

ドームズデイ・サーベイ以前のウッドストック近辺の状態はそれほど明らかではない。

現在の町の位置から約北に一マイルの位置に、ローマ街道（エイクマン街道）が南西から東北に走っていた。この街道は東方ではビスターの地点に達し、ここで南北にはしるローマ街道と交錯していた。この街道をはさんで、チャーウェル川以西の州内の部分には、かなり多くのローマン・ヴィラが存在し、この部分は、州内では、オックスフォード近辺及びドーチェスター近辺とともに、当時最も人口が密な地帯の一つであったと思われる。

《アングロ・サクソン年代記》及びウェセックスの征服に関する伝説を信頼するとすれば、オックスフォード近辺は、メルシア王国の興隆まで、西サクソン王国の一地方をなしていた。アングロ・サクソン人は侵入にあたり、オッ

クスフォード北方でもながく極めて激しい戦闘をなし、五五六年にはバンベリイの近くで土着のブリトン人に破られもする。しかし、七世紀始め（六一四年）バンプトンの近くと思われるところで、シネジルス及びクウイケルムはブリトン人を破り、二千人ほどを殺害したのである。その後、メルシア王国が勢力をいつ拡大し、オックスフォード近辺が西サクソン王国の安定した勢力圏からいつ離れていったかは正確にはわからない。六二八年には、メルシアの偉大なる王ペンダは、南下し、サイレンシスターの近辺でシネジルスとクウイケルムと戦った。彼は「のち条約を結び」、これによって西サクソン領はかなり削減されたはづであった。テームズ河は両王国の国境となったであろうか、そしてオックスフォードの近辺はこれによってメルシヤ領になったであろうか。しかし、ベーダによれば、六三四―五年、ビリヌスは宣教のため、西サクソン領のドーチェスターに僧院を開いた、とされているのである。が、ともかくもこの近辺は両王国の国境地帯にあたり、紛争は近辺でたえず起こっていたにちがいない。もっとも、七世紀の第四・四半世紀の始め頃には、現在の州の大部分は、確実に、西サクソンの北部辺境の範囲外にあった。以来、メルシヤの支配がいつまでつづいたか明らかではないが、八世紀半ば（七五二年）バフォードと思われるところで西サクソン王クスレドはメルシア王エセルベルト王を敗退せしめ、ウィッチウッドの森とテームズ河にはさまれた部分は再び、戦争の結果いかんによって所属がきまる不安定な地帯となった。メルシアの大王オファが出現するに及び、ベンシントンの戦いでの勝利によって、この地方はメルシア領となったであろう。しかし、八〇三年に即位した西サクソン王エグバートはこの地を最終的に西サクソン領とする。というより彼は英国全体の支配を目ざしていたのである。彼によって、決定的にこの地方は西サクソン王の下にあるメルシア王の領地の一部とされたのである。アルフレッド大王がデーン人に対し西サクソンを防衛している間の七年間は、この地は、他のメルシヤの領地とともに、数度デーン人の劫略をうけ、あるときは、デーン人は英国人の小王ケオウルフを屈服せしめ彼をしてメルシアを統治せしめも

した。しかし、アルフレッドはやがてデーン人を破りエトモアの条約（八七八年）を締結した。このなかで彼はデーンローの地域を認めたが、彼は将来のオックスフォードシャーの地域をこのなかに含ましめなかった。彼はまた、エグバートの先例に従ってこの地帯を小王の支配の下におくことをせず、エセルレッド（義息）をメルシアの≪エルダーマン≫とし、彼にこの地を与えたのである。

一〇世紀以前にはオックスフォードには城は存在しなかったであろう。しかしそれまでにはすでに辺境の町としてかなりの重要性をもち、近辺一帯の中心となっていたであろう。九一二年に「エドワード王は、ロンドン、オックスフォード及びオックスフォードに属している地方を取った」と≪年代記≫にしるされている。彼はデーン人と戦い彼らを鎮圧したのである。ウェセックス内の≪州≫は九世紀にまでさかのぼりうるが、メルシアの≪州≫はほぼ一〇世紀以後形成されたといえるのであり、エドワードとエセルフレードの寡婦（大王の娘）の業績にきしうるであろう。この二人は、現存する町を城塞化し、その周囲にある地方をも保護するという政策をとった。オックスフォードに属する範囲は、北方では、九一三年に城塞化されたウォリックの範囲と九一四年に城塞化されたノサンプトンの範囲、東方では、九一五年に城塞化されたバッキンガムの範囲、西方ではグロースターの範囲と、境を接したのである。州はおそらくオックスフォードの町や城を中心とする領域としてこうして形成されたにちがいない。一〇世紀につくられたと思われる≪Burghal hidage≫は、オックスフォードの町に属する地方として二四〇〇ハイドがあるとされているし、一一世紀から始まると思われる≪County Hidage≫においても州に二四〇〇ハイドがあるとされている。また、この数字は、バラーを除いたドームズデイ・サーベイの数字とほぼ一致もするのである。こうしたことは、州が町の周囲に形成されたということ、またその範囲が後の州の範囲とほぼ一致することを示しているといってよい。

州の形成からノーマン・コンケストまでのオックスフォードシャーの歴史は、一つはデーン人の再侵冦の問題と、

一つは大伯領の問題とに関聯する。エドワードの併合（九一一―二年）の後、オックスフォードは、バッキンガムとともにウェセックス領に編入されたのであるが、どの伯領に属せしめられたかは明らかではない。おそらく、エセックス伯領のなかであったろうが。以来、州は様々の伯領のなかに編入せしめられたであろう。カヌートのときにはメルシアの伯領のなかに、ゴドウインの下では、ヘリフォード、グロースター、バークシャー、サマセット諸州とともに彼の息子のスウェイン伯の下に、またレオフリックの下に再びメルシアに、ハロルドの時代には彼の弟のグウイルスの下にイースト・アングリヤのなかに、である。デーン人の再侵入についていえば、一〇〇九年には、彼らがこの州にまできたことは明らかである。彼らはオックスフォードまでき、「町を焼いた」とされている。一〇一〇年、一〇一一年にも、更には、一〇一三年にはスウェイン自から、オックスフォードに来た。この時には「町のものは直ちに降服し彼を歓待した」のである。一〇一六年にはカヌートは全王国を支配し、オックスフォードは彼が最も好む場所の一つになった。一〇一八年ここで彼は集会を開き、すべてのものがエドガーの法に服するよう命じたのである。

ウッドストックの近辺は、サクソン時代にかなり開けていた。オックスフォードには大学はまだなかったが、城があったし、商業も発達していたであろう。[2] ドームズデイ・サーベイには、七二〇戸ほどの家がある、と記されている。ウッドストックの南には、一一世紀前半（一〇二五年）に創立されたエインシャムの僧院[3]があったし、更にその南には、テームズ河をへだててアビンドンには大僧院があった。

伝説によれば、アルフレッド大王は、ウッドストックの近辺にも関係をもっている。大王は、ボエティウスの《哲学の慰め》をここウッドストックのあたりに住んでいるときにほんやくしたのである。またエセルレッド一世は、伝説によれば、八六六年ウッドストックで賢人会議の一つを開いたといわれているし、エセルレッド二世（九七八―一〇一六年）は、ここ《メルシヤの地ウッドストックで、英国法に従って全王国》の平和を維持するであろうという勅

令を、カウンスルのなかで発した、とされている。[4] エドワード・コンフェッサーは、近辺のイズリップに生まれた。オックスフォードのすぐ東のヘディントンは、王の直領地の一部であり、ここには王のなんらかの住居があった。おそらくそれは王の《ハンティング・ロッジ》であったろうが、征服後、ヘンリー一世によってウッドストックにハンティング・ロッジがつくられるにおよび、使用されなくなったと思われる。[5]

(1) 第一節は、おもに V.C.H. のオックスフォードシャーの第一巻、政治史の部分を参考にした。
(2) 一二世紀始めには、製革業者や縮絨業者のギルドがあった。
(3) ドームズディの時期には、四〇ポンド九シルの収入をもっていたとされている。Knowles, The Monastic Order in England, p. 703 参照。後述一八頁以下参照。
エインシャイムの南方一〇マイルのアビンドンには、有名なアビンドン僧院があった。この僧院は一〇世紀後半の僧院復活の三大拠点の一つであった。
(4) Liedermann, Gesetze der Angelsachsen, i, p. 216.
(5) V.C.H., Vol. V, Headington.

二

ドームズデイの時代になると、ウッドストックないしその近辺及び州の状態はかなりはっきりする。サーベイには、《ウッドストック》という名称は、州内の五つの王有林の一つの名称としてでてくる。この五つの王有林は、たてよことも長さ二七マイルほどであった。サーベイにはこれ以外にはウッドストックという名称のものはでてこない。四ハイド半に相当する耕作地がこの王有林に属しており、六人の《ヴイレイン》と八人の《ボディ

ア≫が三カルケイトの耕作をなしていた。レイナルドなるものがこれを保有し、そのために、及び王有林の利用のために、年々王に一〇ポンドをおさめていた。しかし、レイナルドなるものが保有する耕作地が王有林のどこにあったかは明らかではない。これが、ウッドストックないしそれに関係する叙述のすべてである。

ウッドストックなる名称を、サーベイに現われている場合にのみ限って単に一つの王有林の名称と考えるべきか、それとも、サーベイには現われていないが、他のなんらかのものないし場所の名称と考えるべきであろうか。既にのべたように、サクソン王たちはしばしば≪ウッドストック≫に滞在し、会議を開いているのであり、≪ウッドストック≫なる名称を単に森林の名前に限ってしまうことにはなお疑問が残ろう。サーベイは、なんらかの理由で、これを落してしまったのであろうか。サーベイの記述からおちている村は、この州に限ってみても、少なくとも二、三はある。[1] 近辺の部落については、サーベイは比較的よく叙述しているのであるが。あるいは、かつては存在したが、サーベイ当時は消滅してしまった部落あるいは居住地と考えられるべきであろうか。一一世紀の始めには、オックスフォード始め近辺の部落はデーン人によって荒されたとされているし、また、≪北部の叛乱≫（一〇六五年）においては近辺は叛乱部隊が通過した経路に当っており、このために近辺の部落は多かれ少なかれ損害を蒙ったと推測されるのである。[2] しかし、これらのうちいづれかの可能性を十分に確かめうる資料は存在しないように思われる。

ともかく確かなことは、現在のウッドストックの近辺一帯には森林がつづいていたということである。その北西部には、ウィッチウッド、コーンベリーの森、あるいはウッドストックの森が――おそらくコッツウォルド丘陵地帯まで――拡がっていたし、北東部には、バーンウッドの森がバッキンガムシャーからこの州にかなり深くくいこんでいたにちがいない。州北部においては、平地は少なく、州の北西部と北東部にはさまれた狭い部分、エベンロード川とチャーウェル川にはさまれた部分、及びその近辺にあるにすぎなかったであろう。[3] ウッドストックはこの部分にあっ

た。オックスフォードシャーは古くから英国で最も森林が多いところであったのであり、一二世紀ないし一三世紀まで、州は主に森林地帯であったとみられる。[4] すぐまえにあげた州北部の森以外に、州の中部、オックスフォードの東方には、ショトーバー及びストウッドの森が、また南東部にはチルタンの深い森が州にくいこんでいた。市の西方には、テームズ河を隔ててすぐ、バークシャーのカムノア及びベグリイの森もあった。これらの森には、赤鹿、淡褐色の鹿、いのしし、おおかみ、きつね、野うさぎ、山ねこがおり、動物たちは王や領主たちの狩猟の恰好の対象となった。狩猟は王や領主たちが最も好むスポーツの一つであって、森や動物の保存には、特別の官職が設けられ、極めて厳重な監督と、とりしまりがなされる。これらの森はすべて王有林であり、王の独自の官吏によって管理された。ヘンリー二世によって、森林や動物の保存・保護のため極めて厳格な法律「悪名高き」森林法がつくられ、ここウッドストックの地でそれは発布されたのである。首都から比較的近いこれらの森は、王たちの狩猟の場としてとくに愛されたのであろう。動物を保護するために、狼退治には報酬も与えられたし、そのためには特別の官職もつくられたのである。ヘンリー三世の時代に、ノサンプトンシャーのある家臣は、領地を与えられて、ノサンプトン、ハンティンドン、オックスフォード、バッキンガム諸州の狼狩りの義務を負った。[5]

ノーマン王たちは、狩猟が極めて好きで、ウッドストック近辺の森も彼らが最も好む場所となった。三代目のノーマン王であるヘンリー一世は、森の一角に《ハンティング・ロッジ》をつくったし、ヘンリー二世は、クラレンドンやモールボロ等英国の他の二、三の狩猟場でのように、このためにノールウェイから輸入した松材を使用した。[6] ヘンリー一世はウッドストックに、英国で最初の《自然動物園》をもつくり、周囲一〇キロほどを石壁で囲い、なかに、ライオン、ひょう、山猫、ラクダ、やまあらしを放ったといわれる。[7] 近辺のスタントン・ハーコートの領主は、後にサージャンティとして、これらの動物の世話をする役を負うのである。[8] 《スティーブンの事蹟》の著者によれば、ウ

ッドストックは《ヘンリーの最も私的な居住地》となったのである。[9] ヘンリー一世以来、ジェームズ一世まで、ここは狩猟好きの王たちがよく訪れる恰好の場所となる。スティーブンの争乱の時期には、マチルダはここに「城」を築きもした。[10]

サーベイによると、現在の範囲でのオックスフォードシャーには、二五一の定住地ないし村落があった。中世におけるこの州の村落の図面は見当らないようであるが、一六世紀の図面から推量すると、オックスフォードシャーの最も普通の定住形態は、街路に沿って家がかたまっている集落的な部落であった。[11] 集落的ではないものもあり、ウッドストックの西方の、ウィッチウッドの森のなかの村の多くは集落をなしておらず、人家は散在していたといわれている。州南東部のチルタン丘陵地帯でもそうであったろう。しかし、近辺の州と比較してさえも、散在する形態は、ベッドフォードシャーやハートフォードシャーほど一般的ではなかったであろう。[12] ウッドストック近辺の村落も多くは集落的な形態をなしたものであったろう。

一一世紀の始め、さらにそれ以前のほぼ百年の間、王の財務官は、オックスフォードシャーが正確に二四〇〇ハイドを含んでいるとみた。一二世紀始めにも、デーンゲルドの徴集は二四〇〇ハイドという評価にもとづいてなされていた。一一三〇年の《パイプ・ロール》において、シェリフは二三九ポンド九シル三ペンスを徴集していることがわかるからである。[13] (デーンゲルドは当時一ハイドにつき二シル)。しかし、サーベイにもとづいて、州内にあったとみられる各村落のハイド数を計算すると、二五〇九ハイドとなる。このくいちがいは、一つには、州に属するとみて計算した村が、現にそう扱かわれていたかどうかはっきりしないということであり、そのうち他の州の部分に記載されているものをかりに除いて計算すると、州全体の評価二四〇〇ハイドに著るしく接近する。例えば、現在プラウリー・ハンドレッドに属しているが、サーベイのなかではノサンプトンシャーの部分に記載されている村には、チャールト

ン、コティスフォード、フィンミアー、ヒース、シェルズウェルの五村があり、この五村の総ハイド数四二ハイドを、このハンドレッド内の村のハイド数の総計二九三⅝ハイドから除くと、二五一⅝ハイドとなる。これは二½ドームズデイ・ハンドレッドに極めて近い。[14] この州の《プラウ・チーム》数は二六四八½、直領地でのチーム数八五三、他のチーム数一四八八であった。チーム数からみると、この州は英国で中位よりはやや上にこよう。[15]

サーベイによって州の《人口》を推測してみると、農民についていえば、計七六四五人ほどである。このうち、《自由人》は二三人、《ヴィレーン》は三六八二人、《ボディア》は二九三三人、《サーフ》は一〇〇七人である。従って、この州では、農民のなかの自由人の割合は極めて小さい。リンカーンシャーでは、自由なソクマンの数は、ヴィレーンその他の非自由人と同じであったし、自由人の数が非自由人の数より多いウォペンテイクはかなりあったのである。スカンジナビアの影響をうけた州ほど自由人の割合は大きく、西に向えば向うほど自由人の割合は小さくなるのである。[16]

オックスフォードシャーのマナーの価値を総計してみると、一〇六六年には、一九八三ポンド一八シルであった。もっとも州に属する村落の数は正確にはわからないから、これは大略にすぎない。また、この州では、ドームズデイの時代には非常に価値が多くなっているが、この理由も正確にはわからない。[17] シェリフが王に収めるべきファームの額は、一五〇ポンド、プラス、二五（重量）ポンド、ほかに市から二〇（重量）ポンド、ミントから二〇ポンド、金納化された額、約四〇ポンド、等である。このほかに、王は、サクソン伯エドウインの領地から、オックスフォード、ウォリック両州からの分一〇〇ポンドと一〇〇シルを徴集した。

こうした税は、ハンドレッドに割当てられ、人びとはハンドレッド・コートで王の役人に会った。ドームズデイ・サーベイにでてくるオックスフォードシャーのハンドレッドの数は一九である。このほかにリンカーン司教のハンド

ハンドレッドのグループとその中心（第Ⅰ表）

中心地	数	最初のレファレンス	年代	中心地の価値
Upton	3	B.B.I. 1546	1086	18 li
Kirtlington	2 ½	〃	〃	52 li
Shipton	3	〃	〃	72 li
Headington	2	〃	〃	60 li
Bampton	2	〃	〃	80 li 40 S
Bloxham	2	〃	〃	67 li 20 S
Bensington	4 ½	〃	〃	80 li 100 S
		〔Kemble, Cod. Dipl. 1292〕		
Thame		Linctln Cath. Regi. Ant.		
Dorchester		〃		
Bambury		〃		

レッド三つがあったことも確実である。しかしこれらのもののうち三つを除けば、ハンドレッドそのものの名前はでてこず、ただ七つの王領地の名があげられ、そのおのおのにいくつかのハンドレッドが結びつけられているだけである。ウッドストックの位置は、現在のウットン村であるアプトン（王領地）に結びつけられた三つのハンドレッド内にある。州内のハンドレッドの名前は、一一八八年から一一九三年までのパイプ・ロールにすべてでてきており、[18]《ウットンの三つのハンドレッド》という名前も一一七二年のパイプ・ロールにでてきている。現在のウットン・ハンドレッドがアプトンの三つのハンドレッドにあたることは確実である。

ウットンの三つのハンドレッドは、チャドリントンその他の州内のハンドレッドと同じように、行政上一つの単位として扱かわれてきたようである。[19] ウットン王領地の王の役人が三つのハンドレッドの行政を担当していたにちがいない。

ハンドレッドは、しばしば特定のマナーに結びつけられ

る。そのうちエンシェント・ドミーンに結びつけられているものはかなり多い。[20] オックスフォードシャーでは、ハンドレッドは王領に結びつけられていたのであるが、これらの王領も恐らくエンシェント・ドミーンであったろう。エドワード懺悔王の時代に、七つの王領がどのように保有されていたかは、殆どわからず、サーベイのなかでは、ブロクサムは、一〇六六年メルシヤの伯エドウインにより保有されていた、とされているだけである。しかし、征服以前、他の王領が誰かに与えられたことを示す資料はないし、カートリントンは、確実にエドワードが保有していたし、ヘディントンについても同様なことが推測できる。「サーベイ全体の語調からみて、ベンシントン、ウットン、バンプトン、シップトンも王の手にあったと推測される」[21]のである。オックスフォードシャーは、ハンドレッドがエンシェント・ドミーンに結びつけられていた典型的な州であったといわれる。[22] やがて、二つのハンドレッドを除き、ハンドレッドは王領地とともに私人の手に移るのであるが。ハンドレッドが特定のマナーとくにエンシェント・ドミーンに結びつけられているということ、及び、それがそのマナーの授与とともにしばしば授与されるということ、これは、このマナーがハンドレッドの中心をなし、ハンドレッドの行政（あるいは課税、裁判等）がそこの王領を中心になされていたことを示唆するものといってよい。このことは、ウットン・ハンドレッドについてもいえるであろう。アプトンはこのハンドレッドの中心であったろうし、そこの役人（リーブ）は、王領及びハンドレッドの行政を担当していたにちがいない。実際、行政単位としてのハンドレッドは、特定の王領地を中心に百ハイドの単位でつくられたといえそうである。おそらく、課税は、この行政単位を基礎に――この行政単位を創出したのではなく――なされたのにちがいないのである。[23] こうして、アプトンないしウットンは、ハンドレッドの中心であったが、このハンドレッドの中心はやがてすぐとなりのウッドストックに移される。そもそも、サーベイの時期にはすでに、ウットンはそれほど大きな村ではなくなっていた。ハンドレッドの行政の中心であった七つの王領地は、それぞれ王に年々貨幣で地代

をおさめており、ベンシントン・マナーが最も多額で、八五ポンドであったが、ウットン・マナーは最も少なく、一八ポンドにすぎない。王に納める額のうちでは一般に地代の額は最も重要なのであるが、[24] 金納化された地代がここでは非常に少ないのである。

各ハンドレッドのなかにどの村が属していたかは、直接にはわからない。それがわかるのは、早くとも一二七九年のハンドレッド・ロール以後である。しかし、いまウットン・ハンドレッドに属していた村落を、のちのハンドレッドの範囲から類推してみると、第Ⅱ表に示されたごとくであって、その数は四〇（プラス四）前後とみられる。ただし、このうち、グリンプトン、ウットンの一部、オーバーないしネザー・ウォートン、シプトンはノサンプトンシャーの部分に記載されている。またサーベイ当時は、エインシャムと、ヨーントンの一部は、リンカーン司教の所領であり、このハンドレッドには含まれていなかったと思われるし、[25] ラドフォードはこの州に属していたかどうかは明らかではない。これらの七つの村ないしその一部を除いて、各村のハイド数を総計すると、ほぼ三一〇ハイドとなる。これはサーベイで評価されている三つのハンドレッド分よりも一〇ハイドだけ多い。表中に示された村のなかには、このハンドレッドに属しない村が一、二あるにちがいない。なお、この州の村のハイド数の単位が五ハイドであったことはほぼ確実であり、[26] ここであらためて述べるまでもないし、また表からもかなりよく示唆されるであろう。

このハンドレッドの《人口》は――リンカーン司教の領地、エインシャムとヨーントンの一部を除いてみると――九六二人であり、これからラドフォード――所属不明――を除けば、九四八名となる。となりのブラウリー・ハンドレッドは七二九名である。うちわけは、《ヴイレーン》五四二人、《ボディア》二七〇人、《サーフ》一五五人である。ブラウリー・ハンドレッドでは、これに対応する人数は、四二四人、二二五人、八〇人であり、割合はほぼ同じである。[27] サーフの割合が、ウットン・ハンドレッドでは、若干大きいといえるかもしれないが、これは直領地の割合

ウットン・ハンドレッドのサーベイ（第Ⅱ表）

村落	直領主	中間領主	ハイド	チームランド	直領主		小作地			評価（ポンド）	
					チーム	サーフ	チーム	ヴィレーン	ボディア	前	後
N. アストン	ソールズベリのエドワード	アンシュティル	9	20	3	7	5	6	10	10	12
M. アストン	王	サリック	1 h 1 v	10ox	2	2	—	1	4	20 s	40 s
	スタフォードのロバート	ギルバート	2 h 2½ v	4	2	3	2	2	4	3	3
S. アストン	バイヨーの司教	ハンフリー	5	9	4	6	6	12	2	10	14
S. バートン	バイヨーの司教	アダム	10	16	4	9	14	18	5	12	20
イード	バイヨーの司教	ウォダード	1½	3	2	1	2	4	1	40 s	60 s
ベグブルック	ウィリアム伯	ロジャー・ド・ラシー（ラルフ更に受領）	4 h 1 v	6	2	—	2	6	3	100 s (6)	4
ブレイドン	バイヨーの司教	アダム	5	7	2	2	2	8	8	6	6
カシントン	バイヨーの司教	ウォダード	2½	3	2	1	3	4	1	60 s	100 s
	バイヨーの司教	イルバート	6	6	2	—	4	14	6	4	110 s
コグズ	バイヨーの司教	ウォダード	5	8	2	3	—	—	—	10	10
クム	バイヨーの司教	—	1	4	2	2	3	6	6	6	10
デディントン	バイヨーの司教	—	36	30	10	25	20	64	10	40	60
ヘンプトン	ギファード	ラルフ	10	10	2	—	7½	13	4	6	6
ダンスロープ	リジゥの司教	—	5	8	1	3	1	3	—	3	3
	エブルー伯	—	5	5	2	1	2	4	2	60 s	100 s

ハンバラー	ガンのギルバート	ロバート	9	12	2	5	10	20	6	10	10
ヘンシントン	バイヨーの司教	アンガー	5 v	1						10	12
	ウィリアム伯	ロバート	5 v	1		1	1		2	20 s	25 s
	イブリのロジャー	ウィリアム	2½	2½	2	2	½	4		40 s	40 s
ヘイスロープ	ハスコルフ・マザード	—	5	8	2	5	2	4	1	100 s	4
イルベリー	スタッフォードのロバート	ガデイス	1 h 1 v	2	1½	2	½	3	—	20 s	40 s
キドリントン	オイリーのロバート		14	12	3	2	4	32	8	8	14
N. キデイントン	ウイリアム伯	ロジャー・ド・ラシー（ラルフ）	1 h 2½ v	2½	1	—	1	3	3	30 s	40 s
O. キデイントン	ハスコルフ・マザード	メイノ	5	6	2	4	2½	7	10	3	4
N. リー	イブリのロジャー	ゴドフリイ	10	10	2	1	12	33	8	10	10
S. ニューイントン	バイヨーの司教	アダム	2½	2	1	5	—	1	2	30 s	30 s
	バイヨーの司教	アダム	4	3	2	2	1	3	2	40 s	50 s
	バイヨーの司教	ウォダード	3½	4	1	—	1	—	—	50 s	60 s
	バイヨーの司教	ウォダード	1	1	—						
	ウィリアム伯	アンセティル（ロバート）	4	3	1	—	1	1	4	40 s	50 s
ロウザム	イブリのロジャー	ウィリアム	3 h ½ v	6	3	3	3	7	8	4	100 s
	オイリーのロバート	レイナルド	3 h 1 v	9	3	1	3	8	6	4	4
サンドフォード	バイヨーの司教	アダム	14 — 1 v	16	3	2	13	24	13	10	20
シプトン	バイヨーの司教	イルバート	2½	3	2	4	—	3	3	40 s	4
スタントン・ハーコート	バイヨーの司教		26	23	5	12	17	55	28	30	50
ストンフィールド	スタッフォードのロバート	アリュアリック	1	1	1	2	—	—	—	20 s	30 s
タックリー	ヒュー伯	ロバート	8	10	4	2	6	20	9	8	17
ネザコート	バイヨーの司教	ヒュー	1 h ½ v	1	—	—				20 s	20 s

G. チュー	バイヨーの司教		16	26	6	14	16	31	8	20	40
L. チュー	バイヨーの司教	ウォダード	1	1				1		20 s	12 s
	バイヨーの司教	ハンフリー	3½	4			1		2	50 s	50 s
	バイヨーの司教	イルバート	2	2	1		1	3	2	40 s	40 s
	リジウの司教	ロトロック	1	1				2		30 s	30 s
D. チュー	バイヨーの司教	ウォダード	3½		1	—	2	1	6	3	3
	リジウの司教		3	4	1	2	1	5		40 s	60 s
	スタッフォードのロバート	ユーリン	3½	2			1½	1	2	60 s	50 s
	オイリーのロバート	ユーリン	7	7	3	3	4	8	3	7	9
スラップ	イブリのロジャー	ウォダードの息子	3	6	2	1				6	6
ウォーター・イートン	オイリーのロバート		5＋3½	5			9	26	7	6	100 s
ホワイト・ヒル	バイヨーの司教	ロジャー	3 v	1		1				20 s	25 s
	イブリのロジャー	ゴドフリイ	1½		2				2	40 s	60 s
ウィルコート	バイヨーの司教	ウォダード	1	1½	1	2 b				30 s	40 s
ウィドリー	ウィリアム伯	アンシティル・グレイ	2	2	2				2	40 s	50 s
ウルバーコート	イブリのロジャー	ゴトフリイ	5	6	1		4	13	7	100 s	100 s
ウットン	王		5		4		6	10	11	10 s	18
ラドウェル	バイヨーの司教	ウォダード	1½	1					2	30 s	50 s
	オイリーのロバート	レイナルド	1½	1						20 s	5 s
	ヘディングのアヌルフ		1	1						15 s	40 s

	サースティンの息子	オズモンド	2	1½	1				2	20 s	40 s
O. & N. ウォートン	バイヨーの司教	アダム	3 h ½ v	5	2		2½	3	7	40 s	60 s
	アルウィ	—	2 h－½ v	3	1		1	2	3	40 s	40 s
ウォートン	ウィリアム	ロジャー（ロバート）	5	5	2		3	8	5	4	6
ヨーントン	バイヨーの司教	ロジャー	½	1							
グリンプトン	コンスタンティン	ウィリアム	10	6	6	6	5	15	5	6	8
シプトン	フゴニス	ヒュー	2½	4	2	4	1	2	3	40 s	4li 10s
ウットン	コンスタンティン	ウィリアム（イルガー）	5	6	2	2	5	14	2	4	100 s
O. & N. ウォートン	コンスタンティン	ジャースティン	½		½					5 s	10 s
ラドフォード	ウィリアム	アンシティル	3	4	2	2	3	4	8	50 s	3
エインシャム	リンカーン司教	コロンバン	15½	18	3		15	34	33	20	20
ヨーントン	リンカーン司教	ロジャー	½	1							

国王直属の家臣（第Ⅲ表）

The Archbishop of Canterbury	William Levric
The Bishop of Winchester	William son of Manne
The Bishop of Salisbury	Ilbod brother of Ernulf de Hesdin
The Bishop of Exeter	Reibald
The Bishop of Lincoln	Robert son of Murdrac
The Bishop of Bayeux	Osbern Gifard
The Bishop of Lisieux	Benzelin
The Abbey of Abindon	The Countess Judith
The Abbey of Battle	Cristina
The Abbey of Winchcombe	The Wife of Roger de Ivri
The Abbey of Préaux	Hascoit Musard
The Church of St. Denis of Paris	Turchil
The Canous of Oxford and others(4)	The Land of Earl William
Earl Hugh	Richard Ingania and other
The Count of Mortain	servants of the King
The Count of Évreux	Richard Ingania
Earl Aubrey	Rainald the archer
Count Eustace	Robert the son of Turstin
Walter Giffard	Rannulf
William Fitz Ansculf	Roger
William de Warene	Robert the son of Ralf

William Pevrel
Henry de Fereires
Hugh de Bolebech
Hugh de Ivry
Robert de Stadford
Robert de Oigly
Roger de Ivri
Ralf de Mortemer
Rannulf Pevrel
Richard de Curci
Richard Puingiand
Berenger de Todeni
Milo Crispin
Guy de Reinbodcurth
Ghilo the brother of Ansculf
Gilbert de Gand
Geoffrey de Mannevile
Ernulf de Hesding
Edward of Salisbury
Suain the Sheriff
Alfred Nepos of Wigot
Guy de Oilgi
Walter Ponz

William
Hervey
William
Geoffrey
Gernio
Teodric the goldsmith
Aretius
Saric
Siward the huntsman
Lewin
Goduin
Alwi
Alsi
Lewin
Sawold
Alvric
Ordgar
Sawold
Alwi
Hervey the messenger
（バッキンガンシャーのなかに記載されている）
Saint Oswald of Gloucester
（グロースターシャーのなか）

が若干大きいためであろう。いづれのハンドレッドにも自由農民はいない。

農民《人口》のほかに、家族数は別として、国王直属の家臣及び彼らから領地を与えられている家臣、また、僧侶や、オックスフォードの自由人等、自由人もいるわけである。[28] この州に領地をもつ国王直属の家臣は八九名前後であるが、いうまでもなく彼らはこの州に住んでいるとは限らないのであり、この州に住んでいた家臣の数を数えることは不可能である。僧侶の数も正確にはわからないし、またオックスフォードに住む自由人の数も、サーベイはもうら的ではなく、正確にはわからないといってよい。[29] かりに、サーベイにあげられている資料から類推してみると一〇一八の《テネメント》があった、と思われる。うち、二九七は、城壁の修理・補強の負担を課されているテネメントである。さらにこのうち六七は、オックスフォードの市民といわれるものが所有しているものであり、残り二一七は、かなり身分の高い州の家臣たちが所有しているものである。[30]

オックスフォードシャー内に領地をもつ国王直属の家臣の数は、八九名前後であり、その名前は第Ⅲ表に示すごとくである。このうち、俗人の家臣で、一応重要なものとされているのは、四三名もいる。大きさでは中ぐらいであるこの州にしては、この人数は「多すぎる」と言

ハンドレッドの所有者（第Ⅳ表）

ハンドレッド	領　　主
Wooton	王
Chadlington	E. of Gloucester
Bullington	Hugh de Plessy
Ploughley	王
Bampton	William de Valence
Ewelme	E. of Cornwall
Bloxham	Almaric de St. Amand
Lewknor	—
Binfield	E. of Cornwall
Langtree	—
Pyrton	—
Banbury	リンカーン司教
Dorchester	リンカーン司教
Thame	リンカーン司教

わざるをえない。つまり、州内に大きな領地をもつ家臣が少ないのである。しかも、全国的な大領主がかなり多くここに領地をもっているということからすれば、この州の領地には、全国的な大領主の領地の一片をなすにすぎないものが多いということになるであろう。事実、H・ド・フェラーズ、W・ギファード、R・ペブレル、G・ド・レインブドカス、R・ド・モータイマー、H・ムザードのオックスフォードシャー内の領地はそうしたものである。ベレンガー・ド・トドニ、G・ド・ガン、W・ド・ウォーレンも他の州に大きな領地をもつ権門である。オックスフォードシャーには、伯クラスの人物は定住していなかったであろう。《アナーキー》の時代に、オックスフォード伯がモードによって設けられ、オーブリ・ド・ヴィアーに与えられたが、彼はこの州内に殆ど領地をもっていなかった。これは《伯はタイトルの州に領地をもつ権門であるべきだという観念が無視された》[31]ケースの一つであった。彼女も、スティーヴンとともに、重要なバロンの支持が余りにもほしかったのである。

州内に最も多くの領地をもつものは、バイヨーの司教オドーであった。バラードによれば、[32]司教の領地のチーム数は三〇一であり、事実オドーの領地（チーム数二〇〇〇以上）は、ケント（九一九¼）についでこの州にある。これに対しモルタン伯はこの州には殆ど領地をもっていない。オドーは叛乱のかどで、一〇八二年以来投獄されており、また司教の所領は、リジウ、クータンスの司教たちの所領と同じく、王からの《パーソナルな》授与であって、一〇九七年彼の死亡と同時に――それ以前ではなかったが――彼の領地は解体してしまった。解体した領地は、一部は、新たにバロニーを形成するようになったし、他のものは、他の国王直属の家臣の所領に加えられた。また王領に編入されたものもある（たとえば、ウッドストックのとなりの村、ブレイドン）。所領の解体によって形成されたバロニーのうち、この州で最も重要なものは、ウォダードのそれである。彼は司教の領地のうち一八½の領地を授与され、[33]彼のこの州内の領地（タイスロープ、フリングフォード、ウイルコート、ブライタンプトン、カシントン、サウス・ニ

ーイントン、バートン・イード、ボルズコート、リトル・チウ、ラドウェル、コグズ。傍線はウットン・ハンドレッド内の村落）は、他の諸州の領地とともに、アーシックのバロニーを形成する。このバロニーの中心がウットン・ハンドレッド内のコグズになるのである。

他の州におけるように、この州でも、サーベイの編者は、俗人のバロンのなかでは、フランスでの《コント》、英国での《アール》の称号をもつものに対し優位した位置を与えている。そのうち最も重要な人物は、チェスターのアール・ヒューであった。しかも、彼から所領を与えられているもののうち、少なくとも三名のもの、ウォルター、ロバート、ウイリアムは極めて重要な人物である。ウォルターは、チェシャーにおける伯からの受領者であり、チェスター伯のバロンたちの一人であった。ウイリアムは、チェスターの《コンスタブル》でもあったし、ロバートはすぐのちに述べるオイリーのロバートと思われる。オイリー家の受領の関係は一三世紀までつづいていた（サウス・ウェストンとアードリー村）。

オックスフォードシャーの政治に深く関係し、州で実力をもっていた人物は、伯の下に位するようなバロンたちであったといってよいだろう。そうしたバロンとして、オイリーのロバート、ミロ・クリスピン、イブリのロジャーをあげることができる。彼らは州内にバロニーないしオナーの中心 caput honoris をもっていた国王直属の家臣である。サーベイ当時、ロバートはオックスフォードシャー及びウォリックシャーのシェリフであった。彼は、オックスフォードの王城の城代でもあったし、クリスピンは、この州や近辺でオックスフォードとともに最も重要な町であったウォリングフォードにある王城の城代であった。ロバートは、ウイリアム公の家臣（ローヤル・コンスタブル）であり征服に従軍した。征服後ただちに（一〇六六年）バロニーの中心をなすようになる州北部のフック・ノートンを与えられ、やがて漸次、[34] 州北部を中心に広大な領地を与えられたのである。ロバートは、サクソン時代の最も重要なセ

インであったサクソン人ウイゴットの娘をめとり、一門の領地をふやしていった。ウイゴットは、征服の時期にウォリングフォードの領主であり、とくにオックスフォードシャーとバークシャーに多くの領地をもっていた。征服にさいし彼は征服王に協力的であった。センラックの戦い、ロンドンへの突入の失敗後、ウイリアム公が、ウォリングフォードの地点でテームズ河を渡ろうとしたとき、彼は公を歓待したのである。彼の息子もゲルベロイの戦いにおいて征服王に従軍し、王のために討ち死したのであり、彼の戦死には、美談ものこされている。征服後、所領を奪われたサクソン人アリストクラシーは極めて多かったであろうが、[35]そのなかにあってウイゴットはかなりよく領地を維持することができたように思われる。オイリーのロバートはとくに、サクソン人アリストクラシーと親密であったのであろうか。サクソン人アリストクラシーはこの州では征服者ととくに親密であったのだろうか。エドウイン伯は、ラルフ・ドイリー[36]に一セインを与えてもいる。「英国人の権門と征服王の従者が親密な関係、少なくとも平和的な関係にあった短い期間[37]」が、少なくともこの州にはあったのである。オイリーのロバートは、征服後、王の許しをえて、ウイゴットの娘をめとったのであり、ウイゴットの死後、所領の多くは彼の妻の手に移り、さらにドオイリー家のものになった。サーベイの時期には、彼は州内に二四の所領をもっていた。もっとも、彼の後をついだのは――息子がいなかったと思われる――彼の兄弟のナイジェルで、このナイジェルの子孫がオイリー家をつぎ州の名門となるのである。[38]この一門も一二三三年に男系が絶えて解体するのであるが。なお、サーベイにでてくるギュイ・ドオイリーは、ロバートの弟であり、[39]州では王から一つのマナー（ウイギントン村）を受領していた。ロバートとウイゴットの娘の間には娘モードがおり、ウォリングフォードのバロニーの領主クリスピンは、このモードを妻として迎えたのである。クリスピンはノーマンデイの古いアリストクラシーの出であり、征服後はウォリングフォード城の警備を任されていた。また彼はウイゴットの領地の多くを与えられていたか、少なくともモードとの結婚によって、クリスピン家の領

地、ウォリングフォードのオナーは巨大なものになったであろう。オックスフォードシャーには、こうして大領主のコネクションが支配していたのである。オイリー家一門とクリスピン家の連合は更に、この州にオナーの本拠をもつイブリのロジャーによっても強化されていた。ロバートは戦友であるロジャーに、オックスフォード東方のベックリイの領地をゆずり、ロジャーはここを英国内の領地の本拠としたのである。ロジャーは英国内の城を任されることはなかったと思われるが、ノーマンの城塞のうちあるいみでは最重要ともいえるルーアンの警護を（一〇七八年）まかされたほどの人物であった。[40] 伯クラスのものが定住していないこの州では、これら三家の連合勢力は圧倒的であったにちがいない。これらの家門の領地は、サーベイに記載されたスペースの五分の一以上を占めてもいるのである。クリスピンは子を残さずに死んだ（一一〇七年）が、妻のモードはブルターニュ公の庶子であるブライアン・フィッツ・コントと再婚した。彼はウォリングフォードのオナーの所有者、ウォリングフォード王城の城代ともなった。孤城をまもって、ながくスティーブンの軍隊と対峙したのは彼である。

ドイリー家の領地は、一一六六年には、三二⅓の旧騎士領と、――一一三五年以後受領した――一½の新騎士領の広さであった。同じ年ウォリングフォードのオナーは、一〇〇½の旧騎士領と、七⅓の新騎士領からなっていた。ベックリーのバロニーは、やがてセント・バレリイ家のものとなり、この家門は、とくに州中央部から東北部にかけて（バリンドンからプラウリーのハンドレッド）所領と勢力をもった。州東北部のミクスベリには一門の城も築いたのであり、オナーの本拠は、ベックリイからここに移されたかもしれない。全所領は一一六一年には五〇の騎士領に相当した。バイヨーの司教の所領の解体後この州を中心に形成されたウォダドないしアーシック家のバロニーは騎士領二〇⅓分に相当した（一一六六年）。[41]

ドームズデイ以後、州に本拠をもつバロニーが一、二形成されている。ヘデイントンのバロニーは、ドームズデイ

時代には王領であったが、一一四二年頃プラグネット家に与えられて形成され、のち（一二〇三年）トマス・バセットに与えられた。トマスは身分の低い国王直属の家臣であったが、有能な官吏であった彼は、娘をウォリック伯につがせるまでにいったし、まご娘は州の豪族ドイリー家の後をついだプレセティス家にとついだ（一二四三年）。[42] フック・ノートンのバロニーは、ウォリック伯の手に移った（一三世紀前半）のち、一三世紀後半にプレセティス家に移っていたのである。さらに――確実とは云えないが――ミドルトン・ストーニーはキャンヴィル家のバロニーの本拠になったように思われる。[43] キャンヴィル家は、おそらくヘンリー一世の時代に、この領地をえたであろう（一門はスティーヴンの最も熱心な支持者であった）。州には一騎士分のこの領地しかもたなかったが、一門はここをバロニーの本拠にしたようである。ここには一二世紀の城と思えるものの跡が残っているのである。この一門も極く軽い身分の国王直属の家臣であったが、やがてリンカーン城の城代となり、これを世襲するようになった。リチャードの治世に、ジョンの側につき王に叛乱して敗れ、二〇〇〇マルクを支払って領地を回復しなければならなかった一門である。しかし、息子はジョン王に反抗し（一二一五年）、城はこのためにとりつぶされたようである。

オックスフォードシャーの僧院その他は、財産、古さ、知的水準等で、それほどよいものであったとは云えない。財産の点では、となりのバークシャーのレディング、アビンドン僧院とは較べものにならなかったし、古さでもやはり隣りのウースターシャーの僧院に劣っている。僧院解体当時、年八〇〇ポンドの収入をもつようなものはなかったし、サクソン時代から断絶なく続いている僧院もなかったのである。[44] とは云うものの、世俗領主と同じように、僧院も州にかなりの所領、教会をもち、その他部落に対する種々の権利を保有した。ウッドストック近辺のものでは征服前からあったエインシャム僧院（ベネディクト派）が比較的大きい。[46] この僧院は、一〇〇五年、エルダーマンのエセルマールによって創設されたが、征服時に解体し、のち再び一〇九四年ないし一〇九五年に最終的に建立されたので

ある。パトロンは、――普通のアングロ・サクソンの僧院とちがって、王ではなく――司教である。一一九六年、リチャード王は、パトロンであることを主張したが、セント・ヒューはこれに反対し、王は主張を通すことができなかった。ドームズデイ・サーベイの時代には、収入は四〇ポンド九シルであった。この高は、英国の僧院中では三九番目にあたる。[16] ちなみに、アビンドン僧院は四六二ポンド三シル三ペンスである（八番目）。しかし、以後急速に大きくなり、この僧院は、オックスフォードシャーだけで、一二世紀末までに四つのマナー（すべて州北部）、八つの教会をもつようになり、一二九一年には年三三五ポンドにあたる財産を有するようになった。また、僧院の一僧侶が経験したヴイジョンは、マチウ・パリやウェンドーバーのロジャーによっても取り上げられ、中世紀にはかなり重視されたと言われる。[47] それは、一一九六年イースター前の木曜日に、若い僧がねむりにおち、土曜の晩に息を吹きかえした。その間彼は聖ニコラスとともに別界に行ったというのであり、彼はそこでみたことを物語り、これがマチウに取り上げられたのである。

一二世紀には、この地の有力者の寄進によって、多くの僧院が建立されている。ウットン・ハンドレッド内には、一二世紀の前半に名門の子女たちが送られるゴドストウ尼僧院が、オックスフォードのすぐ近辺に創立された。[48] 創立には、ここでもある貴夫人のヴイジョンがまつわっている。ヴイジョンに導びかれてオックスフォードの近辺に住むようになったウインチェスターのあるダームは、更にヴイジョンに導かれて《天からさす光》が指し示すところに尼僧院を建立したのである（一一三三年以前）。ここに創設された僧院は《最も高貴な婦人》二四名が住むものとなった。奉納の儀式には、王、王妃、カンタベリー大司教、リンカーン、ソールスベリ、エクスター、ウースターの司教、その他が列席したし、建立された位置は、セント・ジョーンのジョンの土地であり、彼が尼僧院のパトロンになったが、王のスティーヴン、指導的なバロンのグロースターのマイルズ、レスター伯、司教たち、近辺のアビンドン僧院

長やウエストミンスター僧院長がこれに寄進した。この尼僧院はアリストクラチックであって、英国南部の高貴な婦人たちがここの尼僧になったし、権門からの寄進も以後も相ついでなされたのであった。グロースターシャーのクリフォード家もここに寄進した一門であり、ヘンリー二世が寵愛した《フェアー・ロザムンド》がここに埋葬されることになったのもこのためであったにちがいない。一二世紀はこの尼僧院の絶頂期であり、規律もよく保たれていたとされている。一二九一年の年収は二〇〇ポンドもあった。しかし、貴族的なここの尼僧にはこれでは不十分であったらしく、一四世紀始めには多くの借財を負ったとされているし、オックスフォードの学僧や近辺の僧侶とのスキャンダルは既に一三世紀末からあり、一五世紀半ばには規律は弛緩の極に達したことがしられている。一六世紀の僧院解体の時期には規律はよく保たれているとされているのではあるが。

この時期にこの州の有力者によって創立された僧院はあまたあるが、そのなかで最も有名なものは、一一二九年ドイリー家のロバートによって、オックスフォード城の南側につくられたオズネイ僧院である。この僧院は、ドイリー家の多くの直領地からあがる十分の一税のうちその三分の二、及びその他を与えられ、一二世紀末までには一二〇ケ所の町村に財産をもつようになった[49]（一五二〇年に収入は七三〇ポンド）。ウットン・ハンドレッド内のコズクにも、アーシック家の当主は一一〇三年コズク僧院をつくった。しかし規模は小さく、収入は一二九一年に一六ポンドにすぎないほどのものであった。セント・ヴアレリイ家も一一七六年にスタッドリイ僧院（一六世紀始めに収入は一〇〇ポンドほど）を、ビスターとストラットンの領主であったG・バセットも一一八二年にビスターの僧院をつくった[50]。州の豪族たちはほとんどみな州内に僧院をつくったといってよい。ウォリングフォードの城主フィッツ・コントは、マチルダの忠誠なバロンでありアナーキーの時代に孤城を死守したのであったが、彼は――ヘンリー二世が王位につく以前に――アナーキーの時代に、妻とともに僧院に入ったのである。スティーヴン王も積極的であった。スティー

ヴン、というよりは妻のマチルダは、十字軍遠征に熱心であり（二人の叔父は最初の二人の統率者であった）、一一三七年、騎士たちにエセックスのクレッシング・マナーを、一一三九年にはオックスフォード近辺のカウリー・マナーを与えたのであった。[51] テンプル騎士団は、英国ではこの二つのマナーを拠点に発展していったのである。

リンカーン司教も州に多くの領地をもっていた。それらは、征服前、オックスフォードの南方にあるドーチェスターの司教領からうけ継がれたものであり、主に、バンベリー、テイム、ドーチェスターのハンドレッド内にあった。というよりは、これらのハンドレッド内の大部分の領地は司教の領地なのであり、一連の領地がハンドレッドをなしていたといってよい。ハンドレッドそれ自体司教により所有されていたのである。各ハンドレッドは、サーベイの時期には、バンベリーとテイムは各一〇〇ハイドであり、ドーチェスターは九五ハイドである。ドーチェスターは九五ハイドであるが、以前にはこれに五ハイドのある村落が属し、サーベイの時期までに他のハンドレッドに移されたと想定しうる十分の根拠がある。[52] これらのハンドレッドは通常の場合と異なり、一つの集団をなしておらず、はなれたグループからなっている。たとえばドーチェスターのハンドレッドは三つのグループからなり、とびとびに存在した。またこれらのハンドレッドは大部分司教の領地であったが、必ずしも全部ではない。たとえばドーチェスターの場合、九〇ハイドは司教領であったが、他の五ハイドは王領であり、ナイトにより保有されていた。司教領も、一般の領地と同じく、直領地とそれ以外の土地とに分れている。例えば、テイム・ハンドレッドにおいては、司教の領地は六〇ハイドに相当したが、そのうち三七ハイドが司教の直領地であって、他は彼のナイトが保有していた。

司教は、ハンドレッドにおいて、種々の権利をもっている。そのうちで最も重要なものが《令状差戻し》であった。彼はシェリフを排除し、自己の代官によって王の令状を執行せしめえたし、代官は、通常州法廷でシェリフによって審問される《de vetito namii》の訴訟[53]を審理する権利を有したのである。司教はまたフランクプリッジの検問、パン

とエール裁判、竊盗を処罰する権利等も有した。一二四七年の巡回裁判では、司教のベイリフは、シェリフやシェリフのベイリフを排斥して、ハンドレッド内で差押えをする権利をもっているし、vetito namii の訴訟を行なうことができる、と主張している。そうした権利が附属するハンドレッドの所有は、司教にとって収入の源であった。たとえば、テイム・ハンドレッドは年四〇シルの収入があった。しかし、こうした権利も国王により監視されていたのであって、代官が義務を怠るなら、司教は特権を失うこともあった。たとえば、一二八五年、バンベリイの代官が義務違反のために、この州の三つの司教のハンドレッドで令状差戻し権は王にとりあげられてしまったのである。(54)

(1) カラム村は、一〇世紀以来、アビンドン僧院の所有に属していたことがわかっているが、サーベイには記録されていないし、ソルダーン村についての記録もない。

(2) Oxfordshire, Traces of the Northern Insurgents of 1065, E.H.R., 1898, April, pp. 295—6. しかし、この損害は余り大きくみてはいけない、ともされている。 V.C.H., Vol. I, p. 393, 435.

(3) V.C.H., Vol. I., p. 375.

(4) V.C.H., Vol. II, p. 293.

(5) Red Book of the Exchequer, p. 533 ; Book of Fees, p. 5 ; Cal. of Inq. Henry III, nos. 166, 809. A.L. Poole, From Domesday Book to Magna Carta, p. 31 参照。

(6) Poole, op. cit., p. 88 ; Pipe Roll 32 Hen. II, p. 116.

(7) William of Malmesbury, Gesta Regnum, ii. 485. (ヘンリー三世の三頭のひょうと一頭のラクダをかった (Matthew Paris, Chron. Maj. iii, 324, 334.)。

(8) Book of Fees, pp. 103—4. 一二一三年には、スタントン・ハーコートの領主はこのサージャンティを負っていたのである。それ以前については、不明。

(9) Gesta Stephani, ed., Potter, 92.

(10) op. cit.

(11) K.L. Allison, M.W. Beresford, L.G. Hurst, The Deserted Villages of Oxfordshire, pp. 17—8.
(12) op. cit.
(13) Poole, op. cit.
(14) V.C.H., Vol. V, pp. 3—4.
(15) メイトランド（Domesday Book and Beyond, p. 401）によると、オックスフォードシャーのチーム数は、二四六七であるが、この計算は正しくないであろう。が、かりに正しいとして、この州のチーム数の——わかっている州のうちでの——順位をみると、一二番目であり、他の一八州よりも多い。
(16) Stenton, The Free Peasanty of the Northern Danelaw, pp. 77—9.
(17) 一〇六六年の評価額は一九八三ポンド一八シルであるからドームズディ・サーベイの時期には評価額はかなり多くなっている。この理由は、一〇六六年には不作であったということかもしれない。州全般にわたって評価額は多くなっており、一〇六五年の《北部の叛乱者》の通過経路とみられる村の額がそれほど多くなっているというわけではないから、彼らによる劫略はそれほどとは思われないのである。前注（6）参照。
(18) Cam, Liberties and Communities, p. 110 参照。
(19) Cam, op. cit. pp. 111—2.
(20) Cam, op. cit., p. 69.
(21) V.C.H., Vol. I, p. 375 ; Anglo-Saxon Chronicle, 977.
(22) Cam, op. cit., p. 88. ハンドレッドがとくにマナーに結びつけられている州としては、ほかにランカシャー、シュロップシャー、コーンウォール、デボンシャーがある。このうちランカシャー、シュロップシャーズ人から奪ったところであり、マナー中心に行政が行なわれ、それがドームズディの時代までつづいていたのである。オックスフォードシャーの場合なぜ結合が強かったのかの理由はそれほど明らかではない。
(23) 西サクソンのハンドレッドが、王の村（tun）に附属する領域であり、村の代官によって治められるということは、チャドウィクによって研究され（Anglo-Saxon Institutions, pp. 233—7, 249—58）て以来一般にうけいれられているが、彼はこのことをさらにオックスフォードシャーの場合にもたしかめたのである。
(24) V.C.H., Vol. I, p. 375.

(25) Registrum Antiquissimum of Lincoln Cathedral, (ed. Foster), i, p. 191.
(26) V.C.H., Vol. I, pp. 373—4 ; Round, Feudal England, p. 63.
(27) V.C.H., Vol. VI, pp. 354—5.
(28) 第Ⅵ表参照。
(29) サーベイには、この市に附属している市のマナー（バークシャー内のストリートリイ）及び王のマナー（バークシャー内のステベントン）、少くとも四二以上の《聖ペテロ慈善院》所属の家屋が含まれていないことがわかっているのである。V.C.H., Vol. I, p. 391.
(30) V.C.H., Vol. I, pp. 389—91.
(31) Stenton, First Century of Engl. Feudalism, p. 232.
(32) The Domesday Inquest, p. 262.
(33) V.C.H., VI, p. 126.
(34) V.C.H., Vol. I, p. 395. 彼のバロニーは一度に形成されたのではない。
(35) English Historical Document, II, 1042—1189, pp. 21—2. アングロ・サクソンのアリストクラシーの領地は、一〇八六年までに英国の領地の八%にしかならないまでに収奪された。
(36) 彼がロバートとどういう関係にあったかわからない。
(37) V.C.H., Vol. I, p. 395.
(38) Sanders, English Barony. 以下のバロニーの叙述は基本的にはこの著書によった。ただし、これにはキャンヴィル家のバロニーはあげられていない。
(39) Lincoln Cathedral, Registrum Antiquissimum, ed. Foster, i, 8 ; V.C.H., Vol. I, p. 386.
(40) Ordericus Vitalis, Historia Ecclesiastica, ed. le Prevost, ii, 296. ウイリアム二世治下でロジャーは王の信頼を失い、追放され領地を失った (Heming, Chartularium Ecclesiae Wigorniensis, ed. Hearne, i, 28)。V.C.H., Vol. I, p. 383.
(41) Red Book of Exchequer (Rolls Ser.), p. 302—5 他。
(42) Sanders, op. cit., 〈ディントンのバロニーの項参照。なお、Cam, op. cit., Chap. VII, The Hundred outside the North

Gate of Oxford 参照。

(43) V.C.H., Vol. Ⅵ, pp. 244—5. ; Kennett, paroch. Cntiq. i, p. 347.

(44) Knowles, The Monastic Order, pp. 694—703.

(45) Eynsham Cartulary ; V.C.H., Vol. Ⅱ, pp. 65—.

(46) Knowles, op. cit., pp. 702—3.

(47) V.C.H., Vol. Ⅱ, p. 9.

(48) op. cit., pp. 71—.

(49) op. cit., pp. 90—.

(50) op. cit., pp. 93—.

(51) op. cit., pp. 106—7 ; Poole, op. cit., p. 189.

(52) V.C.H., Vol. Ⅶ, p. 2.

(53) Painter, Feudal Barony, pp. 106—9 参照。

(54) V.C.H., Vol. Ⅶ, p. 4, 115.

三

クリア・レギスが中央行政の中心であるのに対応し、地方では、シェリフが王のエイジェントとなって活動した。エドワード・コンフェッサーの治世においては、地方政治の高官は、コントであり、シェリフはその下にあったのであって、これには通常は第一級の家臣はならなかった。ノーマン王たちは、このシェリフの地位を地方行政の中枢にすえ、征服直後の時期（一〇七〇—一一〇〇頃まで）には、軍事的・政治的重大さの観点から、シェリフには最も有

力な一門がなった。彼らは地方での有力さにおいて、州の権門たちに十分に匹敵する人物であったのである。ドイリー家のロバートは征服後最初のシェリフになったが、有力さにおいて州に住むどの豪族にも十分に匹敵しえたであろう。[1] オドーは、恐らく州にはあまりこなかったにちがいないし、間もなく彼の領地は解体されてしまったのである。

しかし、すでにヘンリー一世の時代には、より低い家門のものもシェリフにとり立てられ、王の行政に手足となって働くようになった。クリントンのジュフロワはその典型的な例である。[2] 彼はウッドストックの近辺に密接な関係をもっていた。サーベイのなかのグリンプトン（サーベイではクリントン）のウイリアムは彼の父であったと思われるからである。[3] ダクディルは「彼は英国で始めてオックスフォードシャーのクリントンに住居をもち、そこから名をとったのである」としている。[4] 息子のジュフレイは、ヘンリー一世の「成り上り」の出納官であり、シェリフにもなった（一一二〇年）。当時の歴史家ヴィタリスによれば、彼は「ヘンリー一世がちりのなかから取り立て、アールやバロンの上に昇進させた卑しい身分のものの一人」なのである。[5] 父はグリンプトンの領主ではあったが、昇進した権勢の地位に較べれば、それは「ちり」にも等しかったのであろう。一一三〇年には、オックスフォードシャーの豪族であるドイリー家の一門の長ロバートは、州のシェリフになってはいる。しかし彼がこの地位をうるためには、初代のロバートとちがって四〇〇マルクを拠出しなければならなかった。[6] ジョフレイのクリントンは、一一三〇年、ロバートがシェリフになったと同じ年に反逆罪のかどで、ウッドストックの法廷で罪を問われた。[7] 州の豪族と「成り上り」との間にまさつが起こったのであろうか。「アナーキー」の時代には、豪族たちは再び地方政治で勢力をのばすようになり、シェリフの地位も彼らによって占められるようになった。ヘンリー二世の治世の最初のころまではそうであり、上記のコグズのアーシック家の当主マナサーは一一六一年にオックスフォードシャーのシェリフになった。[8] しかし、ヘンリー二世の勢力を確立したときには、王の手足となって働く身分の軽いものが取り立てられ、中央の高官のみな

らず、シェリフにもなり、一方、地方豪族はシェリフの地位からしだいに敬遠されるようになったのである。アーシックより後にシェリフになったバセットは――ジャスティシアーの後えいであるが――それほどの名門ではない。[9] 一一七五―九年に、ターヴィルのロバートがシェリフになったが、彼はレスター伯のそれほどのものではない家臣であった。[10] 彼の後にはロバート・ド・ラ・メールがなったが、そのさいに彼が支払った金額はオックスフォードシャーとバークシャーの二つで、一〇〇ポンド以下でよかった。[11] クリントン家の後、グリンプトンの領地をついだブリウェアーも、卑賤の身から一門をおこした官吏であったが、リチャード、ジョン、ヘンリー三世に仕え、オックスフォードシャーやバークシャーのシェリフにまでなった人物であり、「新しいタイプ」のシェリフの典型であった。[12] ミドルトン・ストーニイに本拠をもつキャンヴィルも二騎分の騎士領しか国王から受領していない家臣であったが、彼は、リンカーンシャーのシェリフ及びリンカーン城のコンステブルになり、近辺で絶大な権力を振ったのである。[13]

この時期の少なくとも上層の社会階層は、固定的ではなく、極めて流動的であったように思われる。高い官職にまでついたクリントンのジュフロワは、やがてケニルワースに城をもつ大領主となった。彼は、当時の豪族たちと同じように、ケニルワースに僧院を建立し、この僧院に王から受領した領地やグリンプトンの教会をも含めて多大の寄進をなした。ウッドストックの近辺のカシントンの領地にも教会を建ててこれを近辺のエインシャム僧院に寄進もした。彼はこの領地にも住んでいたかもしれない。[14] 彼は、一たび権勢の地位に昇った後には、比較的容易に上層社会にうけいれられたように思われる。既にウォリック伯の家臣となっており、伯に一七騎分のナイト・サービスを負っていたが、息子のジュフロワ二世はスティーヴンの時代には伯の娘をめとった。[15] こうして二つの家門は、ウォリックとケニルワースに居城をもって、この家門の聯合は数州に亘って強大な勢力をおよぼすことになったのである。[16] キャンヴィルはすでにふれたように、低い身分の国王直属の家臣であったが、リンカーンシャーのブラトルビイのバロニー

を領しリンカーンシャーのコンスタブルでもありリンカーン城のコンスタブルでもあったヘイ一門[17]（一一六六年に二〇騎分の騎士領所有）のあとつぎの娘をめとったのである。彼がリンカーン城のコンスタブルの地位を獲得したのはこのためであった[18]。ヘディントンの極く小さいバロニーの所有者バセットも比較的高い官職についてのち、娘をウォリック伯にめとらせることができた[19]。こうしたことはこの時代には稀ではなかったのである。ジュフリイ・リデルもヘンリー一世がとりたてた《新人》であり、王の裁判官になった人物であるが、英国最大の領主であるチェスター伯は、娘を彼にとつがせているのである[20]。

「アナキー」の時代にはこの州も激戦地となり激しい攻防がくりかえされた。権門たち（ウォリック、レスター、ノサンプトン各伯）が支配し、権門たち（チェスター伯とレスター伯）が同盟し「平和」を維持していた以北の地方とくらべて、荒廃はより甚だしかったにちがいない[21]。マチルダの勢力は主として英国西部にあったが、リンカーンの勝利の後、オックスフォードにきた。オックスフォード城の警備の任にあたっていたドイリーは彼女に城を引渡し（一一四一年春）[22]、オックスフォードはしばらくの間彼女のヘッドクォーターとなった。ここは、フィッツ・コントが守るウォリングフォードとともに西方から突出したマチルダの勢力分野となったのである。《スティーヴンの事蹟》の著者は、この時期にマチルダが近辺にいくつかの「城」を築いたとしてつぎのようにのべている[23]。

> マチルダは、あるものは王の勢力に対し効果的に巻きかえすために、あるものは自分の勢力を防衛するために、有利な地点には到るところ城を築いた。ウッドストック、ヘンリー王の最も私的な別荘地に、ラドコート、河と沼にかこまれたこの地点に、サイレンシスター、主の樫の前のダコンのような宗教家の聖なる教会のとなりに、バンプトンの村、教会の塔に。

しかし、スティーヴンは、やがてサイレンシスター、バンプトン、ラドコートを攻め落し、オックスフォードに迫った。マチルダはここに三ケ月の間包囲され、ついに糧食つきて、しものおりるクリスマス前夜の真夜中、《ロマン

チックな逃亡≫をなし、アビンドンを通ってウォリングフォード城に向ったのである。ウォリングフォード城はやがて攻囲された（一一四六年）が、スティーヴンの勢力のなかに孤城としてもちこたえ、以来戦争は膠着状態に入った。一一五三年、ヘンリー二世はマームズベリにおいてスティーヴンを破り、ウォリングフォードをついに救出した。両勢力はやがてこのウォリングフォードで条約を締結、戦争は終る。ヘンリーは、即位後ただちにウォリングフォードの市民にその忠誠を報いたのである。しかし、城代のフィッツ・コントは僧院生活に入り、ヘンリーの治世の初期に城及びオナーはヘンリーの手に帰することになった。

ヘンリー二世は、各地の城を点検し、≪公認されていない城≫をとりつぶした。アンジュヴァン王朝の時代この州及び近辺にあった城をみよう。[24] まず、オックスフォード、ウォリングフォードには王の城があった。前者は、一一九〇年から三、四年にわたり補強修復された（総工費三〇四ポンド一六シル五ペンス）し、後者は主に一一七二年から世紀末頃までに補強修復された（二一三ポンド一五シル）のである。バロンの城も北オックスフォードシャーにも存在した。セント・ヴァレリイ家はミクスベリに城をもっていた。もっともそれはこの時期に放棄されており、そこのマナーは一二一三年オズネイ僧院に寄進された。ウッドストックの比較的近辺には、ミドルトン・ストーニーにキャンヴイルの城があったし、デデイントンにはチェネイ家の城があった。チェネイ家の城は、後、マーダク家、ドゥ・ディヴァ家の城となった。ミルトンには所有者不明の城があったし、西部には、ミルトン・アンダー・ウィッチウッド、及び――おそらく――シプトン・アンダー・ウィッチウッドに城があった。このうちの少なくとも一つ、アスコート・アンダー・ウィッチウッドはドイリー家のものであった。ドイリー家は、すでにのべたように、王城であるオックスフォード城の城代であり、そのためにこの城は放棄されつつあったにちがいない。ベックリイには、イブリ家ないしセント・ヴァレリイ家が以前からのものに積重ねた城があったと思われるし、コグズにもアーシック家が築い

た城があったろう。しかしこの二つの城はヘンリー二世の時代には放棄されてしまったようである。近辺の州では、バッキンガムにバッキンガム伯の城（一一五四―六四年）があり、ブラックリイにはレスター伯の城があった。上述のクリントン家のケニルワース城は、一一七九年頃王の手に移り、とくに一二一〇年以来ジョン王によって大規模な補強がなされた（一一一五ポンド三シル一一ペンス半）。かつてはウォリックの城と相連合してあたりを威圧したこの城は王の城となり、かえってウォリックの城と相対峙することになったのである。アンジュヴァン王朝の政策は、バロンの城を縮少し、王城を強化することにあったといえる。一一五四年には、王城の数は四九で、バロンの城の数は二二五であったが、一二一四年には、九三と一七九という配分になったのである。王城を地理的観点から分類すれば、南部の海岸地帯、北部の辺境、西部のウェールズの辺境、それに中央部の部類に分けることができる。オックスフォードの王城は、勿論中央部の部類に属し、外敵に対する防衛や攻撃の拠点であった他の地帯の城とは異なった性格をもっていた。内乱における防衛の地点でもあったが、同時にそれは国の通常の行政や地方政治の中心地でもあったのである。即ち、それは地方における王の財産保管所であり、牢獄であり、シェリフやベイリフの公的居住地であった。中央部の城はまた王の行在所になりつつあった。ウインザー城、ウインチェスター城、ノッテインガム城は、王が最も好んだこうした城であった。オックスフォードにも王がしばしば訪れるボーモン・パレスがあった。王は、これらとは別に、城とはいえない好みの行在所をもっており、その代表的なものがウッドストックとクレランドンにあったのである。王はこうした行在所にも巨額の金を注ぎこんでおり、たとえば、ジョン王は、彼の生地であるウッドストックに、一二〇九年から一年間に一〇〇ポンドを下らない額を注ぎこんだのであった。[25] 既にのべたようにマチルダはウッドストックや近辺の場所にいくつかの《城》を築いた。しかしこれらのものは城とはいえないような、すぐ後に容易に取りこわしうるようなものであったにちがいない。[26] 居城はかつての《モート・アンド・ベイリー》のも

のから、石づくりの頑強な城に変わりつつあるのであった。

城についての王たちの政策は、武器携帯についての政策の方向にも現われている。一一七三―四年の内乱直後には、バロンたちの多くの城はとりつぶされた（たとえば、ブラックリーのレスター伯の城）が、内乱の翌年には、武器を携帯する権利を制限する命令が出された。一つは、僧侶が武器を携帯することを禁じたものであり（モーのカウンスルで）、もう一つは、ウッドストックのカウンスルで決定されたものであって、セバーン河以東の地において、弓、矢、短剣の携帯を禁じたものであった。[27]

武人たちは、狩猟をこよなく愛し、王からいかにその特権をうるかに腐心したのである。武人だけではなく、僧侶さえそうであったといわれている。アビンドンの僧院長は近辺のカムノアやベグリイの森で狩をしたといわれる。[28] とりわけ王たちは狩猟にふけり、彼らはいかにして狩猟のための森を保存し拡大するかに腐心した。ジョン王は、ミドルトン・ストーニーの領主キャンヴィルに、ウッドストックのパークでつかまえられた一〇頭の牡鹿と四〇頭の牝鹿を与えて増殖せしめたし、エドワード一世もウッドストック、ベックリー、ウィッチウッドの森の鹿三六頭を与えたのであった。[29] 一一七六年違反に対して課せられた罰金はオックスフォードシャーだけで一三七六ポンドにのぼるほどであった。[30] ヘンリー二世は、一一八四年ウッドストックで、《悪名高き森林法》をつくり、これにより森や動物を保護しようとしたのである。武人たちは、また、トーナメントを愛した。一二世紀末から一三世紀始めにかけて、それはさかんに行なわれたが、その頃は、中世末の試合とちがって、形式ばったものではなく、また廷人や貴人の前で行なわれることもなかった。ゴールも境界線もない広大な空間で戦われ、ときとして血なまぐさいものにもなったのである。法王はしばしばそれを禁じたが、それはますますさかんになったように思われる。リチャード一世は、一定の条件をふしてであったが、それを合法化した。条件の一つは、試合の場所の制限であり、場所は全国で五ヶ所に限ら

れたのである。そのうちの一つは、ブラックリイからミックスベリとの間、一つは、ウォリックとケニルワースとの間であった。[31] いずれにもオックスフォードシャーのすぐ北方にある。こうした制限の目的は、なによりも治安を乱すおそれをなくしたり、バロンたちの反乱の準備の場にならないようにするためであった。ちなみに、ブラックリーは、一一七三―四年の内乱直後とりつぶされたレスター伯の城のあったところであり、ケニルワースも内乱後王の手に移されたものである。[32]

サーベイ当時、州の中心地オックスフォードには、七二〇ほどの家があった。征服前にオックスフォードが地方都市以上の重要性をもっていたことは疑いなく、エドワード懺悔王はかなり多くの商人がここにいたことを示唆している。当時は少なくとも七人の金貸業者が住んでいたとされている。[33] ここには、商人たちが住んでいただけではなく、州内に領地をもつ重要な国王の家臣も家をもっていたのである。これはバラーのマーケットに接する便宜のためでもあったろう。その数は二九人であり、彼らがもつ家の数は二一七であった。一二世紀半ばには、オックスフォードはミッドランド全体で最も重要な町になったのである。しかも、大ていのミッドランド諸州では、州には一つのバラーしかなかったが、このテームズ河の中流近辺では、オックスフォードとウォリングフォードの二つのバラーが一四マイルへだてて存在し、人々をひきつけたのである。[34]

一二世紀半ば頃では、オックスフォードはアカデミックな研究で別に有名であるとはいいがたく、エクスター、ノサンプトン、リンカーンの方がむしろ有名であった。しかし、ロンドン、ミッドランド西部、南部から比較的容易に来やすいという場所的な有利さをもっていたし、政治的にも、カウンスルがしばしばそこで開かれるという事情や、王が市に居所をもち、また近辺のウッドストックに王が好みの狩猟場、居所があり王がしばしば訪れるという有利さがあった。こうして一二世紀半ば以後、オックスフォードは、多くの学者や学生が次第に集まるところとなったので

ある。とくに、ベケットをめぐる争いのなかで、一一六七年、パリから英国人の学者が呼び返されて以後、学問の中心地としてのオックスフォードの将来は約束されたと言ってよい。

(1) Stenton, Anglo-Saxon England, pp. 624—5 ; English Historical Documents Ⅱ, 1042—1189, p. 428.
(2) Poole, op, cit., p. 388 ; Stenton, English Feudalism, p. 36.
(3) the Rev. Cannon Barnett, Glympton, p. 17.
(4) Dugdale, Warwickshire, p. 155.
(5) Ord. Vitalis, op. cit., xi, 2.
(6) Pipe Roll 31 Hen. Ⅰ, p. 2.
(7) Barnett, op. cit., p. 18.
(8) Pipe Roll. 7 Hen. Ⅱ, pp. 25, 26 ; Eynsham Cartulary, i, p. 108.
(9) Poole, op. cit.
(10) V.C.H., Vol. Ⅱ, p. 77 ; Stenton, English Feudalism, p. 268.
(11) Pipe Roll, 2 Ric. Ⅰ, p. 14.
(12) Barnett, op. cit., p. 20.
(13) V.C.H., Vol. Ⅵ, pp. 244—5.
(14) Barnett, op. cit., p. 18.
(15) Stenton, of. cit. pp. 211—2.
(16) English Historical Document, Ⅱ, 1042—1189, p. 23.
(17) Sander, op. cit.
(18) V.C.H., Vol. Ⅵ, pp. 244—5.
(19) Sander, op. cit.
(20) Stenton, op. cit., pp. 34—6.

(21) Poole, op. cit., pp. 153—4.
(22) op. cit., p. 143.
(23) Gesta Stephani, p. 92.
(24) R.A. Brown, Royal Castle-Building, E.H.R., Vol. LXX, 1955 ; A List of Castles, E. Fl. R., Vol. LXXIV, 1959 ; Stenton, of. cit. pp. 197—8.
(25) Pipe Roll 12 John (pp. 121—2) ; Brown, Royal Castle-Building, op. cit., p. 386 note.
(26) Stenton, op. cit., p. 203.
(27) Gesta Henrici, pp. 87, 93 ; Mansi, Collectio, Vol. 22, p. 150 ; Powicke, Military Obligation, p. 52.
(28) Chron. de Mon-de Abindon (Rolls Series), ii. 114, 219, 220, 247 ; Poole, op. cit., p. 30.
(29) V.C.H., Vol. Ⅵ, p. 244.
(30) Poole, op. cit., p. 339.
(31) op. cit., p. 25.
(32) Brown, Royal Castle-Building, pp. 252—3.
(33) V.C.H., Vol. Ⅰ, p. 389 ; Brooke, Catalogue of Anglo-Norman Coins, i, p. clxxviii.
(34) 州内の多くの領地はテームズ河を隔て州を異にしているにもかかわらず、ウォリングフォードに財産や家をもっていた。ドイリー家もそうである。 V.C.H., Vol. Ⅰ, p. 389.

四

ウッドストックは、すでにのべたように狩猟ずきの王たちが訪れる場所として重要であったばかりではなく、《宮廷》としても重要な場所となった。《宮廷》は、中世のかなり終り頃まで特定の場所に固定されず[1]、「王のゆくところ

ろに」あった。臣下たちは、王の決裁を仰ぐために、絶えず動きまわっていた王の後を追って奔走したのである。王のお気にいりのこの狩猟場もしばしば宮廷となった。ヘンリー一世の治世にもすでにここはしばしば重要な宮廷となっており、例えば、一一一〇年、三名の司教がここに集って決裁がなされたとされている。[2] しかし、ウッドストックが宮廷として最も重要であったのは、ヘンリー二世の治世においてであったろう。ベケットが――シェリフのエイドに関して――ヘンリーと最初に衝突したのは、《ウッドストックのカウンスル》においてであった[3]（一一六三年）。既にのべたように、セバーン河以東の地において一定の武器の携帯が禁ぜられたのもここで開かれたカウンスル（一一七五年）においてであったし、《悪名高き森林法》が制定されたのもウッドストックで開かれた宮廷においてであった（一一八四年）。森林法は「二人の大司教、司教、バロン、伯、貴紳の評議と同意によって、ウッドストックで」制定された、と一六世紀のコピーに述べられている。[4] スコットランド王マルコム及び弟ウイリアムが臣従を誓ったのはウッドストックにおいてであった[5]（一一六三年）し、つぎのスコットランド王となったウイリアムのためにヘンリーが大バロン、ボーモント子爵の娘をめとらしめたとき、婚礼の式はここウッドストックで荘大に行なわれたのである[6]（一一八六年）。寵愛する女ロザムンドをかこったのもここであり、伝説によれば、王はマナー・ハウスの城壁の外に《フェアー・ロザムンド》をかこってここをしばしば訪れた。妃のエレアノールがかくれ家をつきとめ、毒殺してしまったという話は――恐らく一四世紀につくられた全くの伝説であろうが――いまもパークのなかにロザムンドが用いたといわれる《ロザムンドの井戸》が残っている。彼女が上述のゴドストウ尼僧院に埋葬されたということもほぼ確実である。ヘンリーの息子ジョンはここで生まれたのであるし、彼はこの生地のパレスを拡大もしたのである。一二一五年バロンたちに屈服してのち、彼はここに退いて休養もした。ヘンリー三世もまたウッドストックを愛した。北ウェールズの王たちとの抗争を終熄せしめるため、彼が（ウッドストックの）条約を王と結んだ（一二四七

年）のはここであった[7]し、とりわけ、スコットランド王と娘である王妃を盛大に歓待したのもここであった。この夫妻をもてなしたさいには「王の命により数多くの貴族、貴族にともなわれた数千の従者が集り、無数の馬がつながれた。マナー・ハウスは、厖大な数の人たちをうけいれることができず、オックスフォード市も周辺の村々も収容することができなかった。ロンドンに向う行列は別々の道をゆかねばならなかった。途中の町や村はこれほどの人数の用達にはこたえることができなかったからである」と、マテイウ・パリは云っている。

一二世紀後半から一三世紀半ば頃までに、かつて州に住んだ有力な家門は消滅してしまったか、それに近い状態にあった[8]。ドイリー家は次第に勢力を失っており、一二三四年当主の死とともに男系は絶え、フック・ノートン及びその他の領地はおいのウォリック伯の手に、ついでプレセテイス家の手に移った。しかし、プレセテイスがついだバロニーは非常に縮少されており二騎分のナイト・サービス（ないし四人分のサージャンティ）しか負っていなかったのである[9]。ベックリーのバロニーは、セント・ヴァレリー家に移っていたが、男系が断えてドルー伯の手に移り、彼の他の領地とともに一二二六年ヘンリー三世により没収されてしまった。やがてこの領地はウォリングフォードのオナーのうちの多くの領地とともに、リチャード・コーンウォールに与えられる。ウォリングフォードのオナーは、フィッツ・コントが僧院に入ってのち、王の手に帰していたのであり、王の弟であるコーンウォール伯は、王に対する反抗と和解ののち、一代限りでこれを与えられた（一二三一年）のである。ウォリングフォードのオナー及び城は、彼がほぼ同じ頃与えられたバカムステッドのオナー及び城とともに、テームズ河中流地帯及び南部ミッドランド地帯における彼の財産と勢力の拠点となった[10]。ヘデイントンのバロニーも、バセット家の男系が絶えて一三世紀の前半に解体の状態にあった[11]。長女はウォリック伯に嫁したが、伯の死後王に反抗的であり王に嫌われているシウォドと再婚したの

である。シウォドは、コーンウォールとも州内で激しく争った人物であった。[12] アーシック家は、ヘンリー三世の治世なかばまで州で有力な一門であったが、男系がたえ、領地は州南部のグレイ家の手に移った。しかし以後グレイ家の領地も複雑な屈折をたどることになる。キャンヴィル家の領地も一三世紀前半に解体し、領地の一部は、もともとドイリー家の家臣であったスタントン・ハーコート家に、一部はヘンリー三世の末年にソールスベリ伯の手に移り、やがてさらにランカスター家に移ってしまう。ウォリングフォードのオナーの一部（ビスター近辺の七つの領地）を受領していた他のバセットの一門の所領も同じくランカスター家の大所領のなかに吸収されてしまう。[13] こうして一三世紀半ば頃には、この州に住んだ豪族の一門は殆んど解体していたのである。オックスフォードシャーにはもともと全国的な大領主は住んでいなかったのであるが、州内の領地は、ますます、他の州に住む権門の大所領の一部をなすにすぎないようになり、州に住んで州に大きな勢力を振う豪族がいなくなってしまったのである。のちに述べるように、州内のハンドレッドを支配するものは、ほとんど、――バリンドン・ハンドレッドを所有したプレセテス家を除き――この州に住まず、国の政治で有力な権門や貴紳である。一四世紀には州内の大領地は王の手に帰する傾向があった。[14] コーンウォール伯家の所領は、男系が絶え（一三〇〇年）、王の手に移っている。こうして、州内に住む豪族が解体し、州に住まない権門や貴紳が州の《上級》勢力となるということは、他面からみれば、より小さい規模のナイト級の地方有力者の発言が増すということに並行するかもしれない。例えば、一四世紀始めには、かつてはドイリー家の家臣であった（第Ⅲ表）サー・ダモリーは、オックスフォード王城の城代であり、州のシェリフになっている。この二つの職は、ドイリー一門がかつてはしばしば兼ねたものであった。[15]

ハンドレッドは、王の手にあるものと、私的な領主の手にあるものとがある。一三世紀末には、英国のハンドレッドの総数六二八ほどのうち、私的なものは三五八であり、王のハンドレッドは二七〇である。王のハンドレッドは、

東部ミッドランドに多く、私的なハンドレッドは南部及び南西部に多いといわれている。[16] 近辺では、バッキンガムシャー、ウォリックシャーには私的なハンドレッドは存在しない。これに反し、オックスフォードシャーでは、一四のハンドレッドのうち、一二が私的なハンドレッドである。各ハンドレッドの領主をみると、第Ⅳ表のごとくである。[17] 王のハンドレッドは、ウットン・ハンドレッドと、その東どなりにあるプラウリー・ハンドレッドの二つにすぎない。ドームズデイの時代には、リンカーン司教のものを除き、他はすべて王の手にあったとみられるから、この間多くのハンドレッドが王の手から離れたわけである。これらハンドレッドの所有者をみると、フック・ノートンにバロニーの本拠をもつプレセティスを除けば、いづれも国の政治で重要な役割を果している人たちである。コーンウォール伯は王の弟であり、この時期の王の、またはバランスのウイリアムの勢力に反対したリーダーであったし、ウイリアムはヘンリー三世の妃の叔父であって、サヴォイから移ってきて以来国の政治の中心を占めた人物、セント・アマンドのアルマリックは、彼の息子であって、抗争の時期の一二名のカンスラーの一人となった人物である。彼らはすべて、一三世紀前半にハンドレッドを与えられたのである。国の政治では重要な役割を果していた彼らは、いづれもオックスフォードシャーに住む一門ではなかった。

プラウリー（一二五五）	一一ポンド六　シル九ペンス半
チャドリントン（一二七九）	二四　〃　一一　〃　七ペンス四分の一
バリンドン（一二八二）	七　〃　九　〃　一　〃
テイム（中世中）	二　〃
チルタン（一三〇九）	二五　〃　一　〃　一　〃
ノース・ゲイト（一二八二）	二〇　〃

いまハンドレッドの行政活動をみるために、ハンドレッドが年間に受領する額をみよう。ウットン・ハンドレッドのそれは、残念ながらしらべることができなかった。[18]

受領する額の内分けをみよう。プラウリー・ハンドレッドのそれをみてみると、つ

ぎのごとくである。[19]

hidage	二ポンド　一シル
view of frankpledge	二　〃　一九　〃　六ペンス
certainty money	四　〃　一三　〃　三ペンス半
その他	

四つ半のチルタン・ハンドレッドの額の内分けをみてみよう。このハンドレッドは、エドワード一世のいとこのエドモンド・コーンウォールのハンドレッドであったが、彼の死後(一三〇〇年以後)、王のハンドレッドになった。一三〇九年の会計簿によるとつぎの通りである(村の数二四)。

hidage (and warpenny)	六ポンド　九シル三ペンス
view of frankpledge	三　〃　七　〃
hundred court	九　〃　一六　〃　七　〃
perquisites of the leet	五　〃　六　〃　七　〃

興味があるのは、これらの額は極めて長く固定されており変わらないということである。例えば、チャドリントン・ハンドレッドの額は、一二七九年から一三二七年――おそらくこれより後までも――変わらなかったし、プラウリー・ハンドレッドの、ハイデージと検問の額五ポンド六ペンスは、一六五二年まで変わらなかった。テイム・ハンドレッドの額は中世中四〇シルであったのである。ハンドレッドによりその額には大きな違いがあることが注目される。リンカーン司教のハンドレッドを別とし、例えば、バリンドン、プラウリーのハンドレッドの額は極めて小さい。これは、ハンドレッド内のマナーの領主がハンドレッドの裁判の下にないからである。プラウリー・ハンドレッドの例

をとろう。一つの村落（ソウルダーン）は例外的な《フリー・マナー》（ハンドレッド・ロール）であって、ベイリフは王の令状がなければ、入ることができない。その領主は、欲するなら、ハンドレッドの二大裁判におもむき、《領地の人々に対する彼の自由》を求めることができたし、また欲すれば、――領民は罰せられずにそこに行くことができるので――裁判の利得を求めることもできたのである。[20] また、このハンドレッドには、ウォリングフォードのオナーに属する領地が数多あり、これらのものは、種々ハンドレッドの行政の管轄の外にあった。二つの村は、フランクプリッジの検問を、オナーのベイリフのもとでうける。三つの村の訴訟は、年一回はオナーの法廷で行なわれるし、二つの村のオナーの中間領主（オズネイ僧院とルーリイ僧院）は、それぞれ検問、裁判を行なっている。また、ウェストミンスター僧院もここに領地をもち、特権的地位を与えられており、僧院長は、イズリップに法廷を開き、二つの村の領民を裁き、うち一つの村で検問を行なっている。また、ある二人の領主は、みづから検問を行なった。もっとも、この二人の場合には、シェリフと王のベイリフがいなくてはならないし、彼らに一〇シルを支払わねばならぬ。こうして、プラウリー・ハンドレッドは、王のハンドレッドであるにもかかわらず（?）、王の権限の巾は小さいのである。バリンドン・ハンドレッドは、その額は一層小さいのであったが、ここでも、それは、ハンドレッドの所有者であるプレシーないしプレセテイス家以外に、ハンドレッドの行政に服しない多くの領地があったためである（ウォリングフォードのオナーやテンプル騎士団の領地）。過去、王やウォリック伯がふんだんに恩恵を与えてしまったのである。[21] こうした農村のハンドレッドに比較すると、都市的なハンドレッドでは、その価値はより高い。例えば、ノース・ゲイトのハンドレッドは、小さいにもかかわらず、高い。

資料的に最も豊富なハンドレッドであるプラウリー・ハンドレッドをとって、一三世紀半ば頃の所領の状態をみてみよう（第V表）。[22] このハンドレッドに多くの所領をもつ直属の家臣は、ウォリングフォードのコンウォール伯（少な

HONORS AND KNIGHTS' FEES, 一三世紀半ば（第V表）

Honor and Overlord	Manors	Fees	Mesne lords	Tenants
WALLING-FORD EARL OF CORNWALL	Bicester	..	..	Longespée
	Wretchwick	2	Longespée	Audley
	Stratton Audley	..	..	Audley
	Chesterton	2	..	De Chesterton
	Lower Heyford	1	..	De La Mare
	Upper Heyford	1	..	Redvers
D'OILLY EARL OF WARWICK	Bletchingdon	I	..	Damory
	Bucknell and part of Tusmore	I	Damory	Damory, Pateshull
	Fulwell	I	Damory	Oseney Abbey
	Hardwick	I	Fitz Wyth	Aundeley
	Kirtlington	½	..	Dives, De la Grave
	Tusmore	½	Fitz Wyth	Aundeley
	Weston-the-Green	2	? Damory	Oseney Abbey

ARSIC	Fringford	..	..	Grey Gardiner
	Fritwell	..	..	Grey
	Newton Purcell	Sergeanty	Grey	Purcell
	Somerton	..	..	Grey Gardiner
CHESTER EARL OF ARUNDEL	Ardley with Northbrook in Somerton	1	Earl of Warwick	Fitz Wyth
RICHARD'S CASTLE MORTIMER	Souldern	..	..	De Arderne
GIFFARD	Stoke Lyne with lands in Tusmore	1 ½	Earl of Oxfond	De Lisle De Cokefield
HONOR OF GLOUCESTER	Finmere	1		De Turri–De Broke
	Hampton Gay with Otley in Oddington	½	Champernoun	De Gay–Oseney Thame Abbey
	Hethe	½	..	De Verdun
	Lower Heyford	..	Champernoun	Henred
	Newton Purcel Shelswell	1	..	Purcel De Weston De Newton

HONOR OF ST. VALERY	Hampton Gay	½	..	De Gay–Oseney Abbey
	Mixbury	1 ½	..	Oseney Abbey
	Newton Purcell	½	..	Purcel
	Willaston	½	..	(demesne manor)
ISLIP LIBERTY	Islip with Fencott and Murcott	..	..	..
	Launton	..	..	..
	Northbrook in Kirtlington	¼	..	De Gay
	Noke.	½	..	De Williamscote
	Oddington	½	..	Le Poure
DEVON AND THE ISLE	Fritwell	..	..	Foliot
	Noke	½	..	Foliot
HONOR OF WARENNE	Stratton Audley	¼	..	Gargate–Bicester Priory
STAFFORD DE STAFFORD	Bletchingdon	½ (Mortain)	Grenvile	Prescote
				St. Fey

MANDEVILLE EARL OF HEREFORD	Wendlebury	2	De Oseville	[illegible] / Fitz Aumary
ANCIENT DEMESNE	Kirtington / Bignell	½	Tenants in chief	Basset / Le Bret–De. Langley
LESSER TENANTS IN CHIFF	Godington	..	Longespée	Camville
	Middleton Stoney	..	Longespée	..
	Bainton	..	De Hampden	Carbonel
	Cottisford	free alms	Abbey of Bec	Priory of Ogbourne
	Charlton	free alms	Abbey of St. Évroul Priory of Ware	Le Poure
	Hampton Poyle	1	De Hampton–De la Poyle	..
	Betchingdon	Sergeanty	Grenevile–Prescote	
	'Saxinton'	..	Boffin	De Blakeville

オックスフォードシャーの人口と身分（第Ⅵ表）

	ドームズデイ・ブック、1086			ハンドレッド・ロール、1279		
自由人	国王直属の家臣		84	国王直属の家臣		72
	他の自由人	undertenants occupiers burgenses Francigenae milites homines liberi homines priests を含む	250	他の自由人	socmen free socmen burgage tenants libere tenantes liberi homines priests を含む	3389
非自由人	Villani		3545	Villani		1969
	Bordarii		1889	Cotarii, coterelli, cotagiarii, etc.		1349
	Servi		163	Servi と tenants in bondage		921
	その他		27	Nativi		620
	Buri		17	その他		510
				Custumarii, consuetudinarii,etc.		457

くとも六騎士分)、ドイリーないしウォリック伯(七騎士分)、アーシック(かなり)、グロースター伯(少なくとも三騎士分)、セント・ヴァレリー(三騎士分)等である。

ドームズデイ・サーベイにせよ、ハンドレッド・ロールにせよ、《人口》の計算は容易ではない。現にオックスフォードシャーのV・C・Hにおいても第一巻と第二巻の計算の結果は異なっているのである。第一巻では農民人口は七六四五であるが、第二巻では六七七五である。より新しく出版された一巻の計算の方がより正確であろうが、いづれも計算の基礎が十分明示されていないので、両者を評価することはできない。ただ、第二巻には、ドームズデイの《人口》とハンドレッド・ロールの《人口》とが計算・比較されているので、これをかりに引用し、二つのサーベイ間の《人口》の変動の概要をみることにしたい。いづれも第二巻による計算に従うと、《人口》は六七七五から九二八七となっており、この間に《人口》は著るしくふえたということができる(第Ⅵ表)[23]。とくに自由人の数は増加した。国王直属の家臣の数は、八四名から七二名に減少しているが、他の自由人の

各ハンドレッドの町村数(1316)第Ⅶ表

ハンドレッド	町村数 (ハンドレッド・ロールによる)
Wooton	56
Chadlington	55
Bullingdon	43
Ploughley	41 (32+1)
Bampton	40
Ewelme	24
Banbury	21
Bloxham	20
Lewknor	15
Binfield	12
Dorchester	10
Langtree	10
Pyrton	9
Thame	9
Islip-Liberty	6
計	371

プラウリー・ハンドレッドの人口の変動（第Ⅷ表）

	Domesday Survey 1086					Hundred Rolls Survey 1279						
	No. of estates	Villani	Bordars	Serfs	Total no. of tenants	No. of manors	No. of lesser estates	Fee tenants	Nativi	Servi	Cottars	Total no. of tenants
Ardley	1	8	15		23	1		5	9			14
Bicester	1	28	14	5	47	1		3	14			17
Bignell						2		7	23			30
wretchwick	1					1			25		7	32
Total	2	28	14	5	47	4		10	62		7	79
Bletchingdon	2	9	7	7	23	2	1	18	20			38
Boycott (Bucks)	1	1			1	1			13		6	19
Bucknell	1	6	3	3	12	1	2	2	13		4	19
Saxenton	2	9	4		13			2	9			11
Total	3	15	7	3	25	1	2	4	22		4	30

Chesterton, Great	1					1		3	24		28	55
〃 , Little								2	8			10
Total	1	22	10	2	34	1		5	32		28	65
Charlton	1					1	1	5	26		2	33
Fencott								2	30		8	40
Murcott								1				1
Total	1	15	11	6	32	1	1	8	56		10	74
Cottisford	1	10	5		15	1	1	5	15		1	21
Finmere	2	10	5	4	19	1		4	29			33
Fringford	2	18	8	4	30	2		4	19		8	31
Fritwell	2	12	7	3	22	2		11	14	14	5	44
Godington	1	16	2	1	19	1	2	7	21		6	34
Hampton Gay	2	1			1	1		8	2			10
Hampton Poyle	1	7	2	2	11	1		6	15		7	28
Hardwick	1	5	2		7	1	2	2	8			10
Hethe	1	8	5	1	14	1	1	1		26	2	29

Heyford, Lower	2					2		1			19	20
Caulcott							1	6	33			39
Total	2	11	12	5	28	2	1	7	33		19	59
Heyford, Upper	1	10	1	3	14	1			31		7	38
Islip	1	10	5	2	17	1		6		34		40
Kirtlington	4	42	25	4	71	1	4	36	40		2	78
Northbrook	1	2		1	3	1		6	9		1	16
Total	5	44	25	5	74	2	4	42	49		3	94
Launton	1					1			64			64
Lillingstone Lovell (Bucks)	2	8	2	1	11	3		16	10		15	41
Middleton Stoney	1	25	7	5	37	1		18	27			45
Mixbury	1	18	11	1	30	1			37		11	48
Fulwell	1	3	2	1	6	1					7	7
Willaston						1			18		1	19
Total	2	21	13	2	36	3			55		19	74

Newton Purcell						1		7	9		6	22
Noke	2	3	6	2	11	2		8	15		6	29
Oddington	1	10	4	2	16	2	2	1	13			14
Shelswell	1	7	7	2	16	1		3	7			10
Somerton	3	17	9	2	28	2		15	28			43
Northbrook	2	9	5		14		2					
Total	5	26	14	2	42	2	2	15	28			43
Souldern						1		7	25			32
Stoke Lyne	1	34	9	2	45	2		6	14	13	2	35
Bainton	1	1	2		3	1		5	11			16
Fewcot							4	4		6		10
Total	2	35	11	2	48	3	4	15	25	19	2	61
Stratton Audley	1	8	2	1	11	2	1	6	44		8	58
Tusmore	1					2	3	1		10	9	20
Wendlebury	1	4	5	3	12	2	2	9	13			22
Weston	1	17	11	5	33	1		5	35		10	50
Total	54	424	225	80	729	55	29	264	820	103	188	1375

数が目ざましく増加したのである。もっともこれには様々の留保を附さねばならない。[24]

町村の数もかなり増加しているといえそうである。ハンドレッド・ロールには、それは三〇〇以上になった。一四世紀始めには、州全体は公的に（徴税のため）地理的単位に分けられた。一三一六年に作成された文書 nomina villarum によると、州の町村数は三七一である。これを各ハンドレッド毎にみてみると、第Ⅶ表のごとくであり、ウッドストックが属するウットン・ハンドレッドの町村数が最も多く、五六である。

ハンドレッドのうち、ハンドレッド・ロールに最も良く叙述されているプラウリー・ハンドレッドの人口をみてみよう。もっとも、これもドームズデイ・サーベイよりもより正確であるとはいえないのであり、種々の不正確な点が推測されるのではあるが。[25] 一二七九年のサーベイにおいては、《人口》は七二九（ヴィラニ、四二四、ボディア二二五、サーフ八〇）であったが、一二七九年のサーベイにおいては、一三七五（自由小作人二六四、ナティヴィ八二〇、セルビ一〇三、コッター一八八）で、この間に《人口》は二倍ほどになったのである。このハンドレッドのうちでは、王領でありハンドレッドのベイリフがいるカートリントンの人口は、ドームズデイにおいても（七一）、ハンドレッド・ロールにおいても（七八）最も多いが、人口の伸びはそれほどではない。この古いハンドレッドの中心地にはまだ及ばないが、人口の伸びは著るしいものがあったであろう。表には《マーケットで暮している》人びとは含まれてもないのである。[26]

この州で自由人の数は増加したとはいえ、ハンドレッド・ロールに現われている各州の自由人の割合を比較するならば、この時期においてもこの州では、他の州に比して非自由人の割合は依然として大きく、北どなりのウォリックシャーと同じ部類に属している。この点、非自由人の割合が比較的小さい東どなりのバッキンガムシャーとは異なっている。またオックスフォードシャーでも、各ハンドレッドによって、非自由人の割合はかなり異なっており、ピア

トン、ユーエルム、ラングトリー等南部のハンドレッドでは、非自由人の割合は比較的小さく、自由人の割合は高い(ただしチルタン丘陵地帯のビンフィールト・ハンドレッドはそれほどでもない)。非自由人の割合は州北部でより高い。上記のブラウリー・ハンドレッドは――リンカーン司教の南部の小さいハンドレッド、ドーチェスター・ハンドレッドとともに――非自由人の割合が最も大きい。ウットン・ハンドレッドでも、バラーとなったウッドストックを除いてみるならば、かなり高い割合となる。地代形態をみると、ウッドストックの属するウットン・ハンドレッドや東どなりのブラウリー・ハンドレッドでは、非自由人の貨幣支払いと賦役とはおおよそ等しい。西どなりのチャドリントン・ハンドレッドでは、非自由人の義務のなかで、貨幣地代に対して賦役がいちぢるしく超過している。これに対し、州南東部のピアトン、ユーエルムのハンドレッドでは貨幣地代がかなり多い。農奴の割合が比較的高いこの州において――それにもかかわらず――貨幣地代の割合も比較的多い、とみられている。(27)

(1) ヘンリー二世の治下に、最初に、ウェストミンスターに大蔵省が比較的固定的に位置するようになった。もっとも大蔵省が他に移動しないようになったのは一四世紀末である。 Tout, The Beginnings of a Modern Capital, Collected Papers of T.F. Tout, Vol. Ⅲ. 議会がウェストミンスターに固定的に開かれるようになったのは百年戦争以後である。Tout, op. cit.
経済上の中心地であったロンドンが政治の中心地ともなったのは一四世紀後半にすぎない。

(2) 出席した司教はロジャー(ソールスベリ)、ロバート(ロンドン)、ヴイルラのジョン(バス・ウェルズ)である。決裁はアビンドン僧院に関することがらであった。

(3) Poole, op. cit., p. 202 ; op, cit., pp.319―321 ; Round, Fendal England, pp. 398―.

(4) Poole, op. cit., p. 32 ; Petit-Dutaillis & Lefebre, Studies and Notes Supplementary to Stubbs' Constitutional History, pp. 180―1. 参照。

(5) J. Fantosme, Chronique de la guerre entre les Anglois et les Ecossois (in Chronicles of Stephen, Henry Ⅱ, and Richard Ⅰ, ed. Howlett, Rolls Series), iii, l. 1259.

(6) Poole, op. cit., p. 279.
(7) Powicke, The Thirteenth Century, pp. 400, 412.
(8) Sanders, op. cit. 参照。
(9) op. cit., p. 54, Note 6, 7.
(10) Powicke, op. cit., pp. 40—1.
(11) Cam, Liberties and Communities, chap. Ⅶ.
(12) V.C.H., Vol. Ⅴ, p. 160.
(13) V.C.H., Vol. Ⅰ, p. 440.
(14) op. cit.
(15) Cal. Fine R. 1307—19, 336, 339 ; V.C.H., Ⅴ, pp. 160—1.
(16) Cam, The Hundred and Hundred Rolls, p. 147.
(17) op. cit., pp. 276—7.
(18) V.C.H., Vol. Ⅵ, p. 4.
(19) op. cit.; Rot. Hund. ii. pp. 826—7.
(20) Rot. Hund. ii. p. 826.
(21) V.C.H., Vol. Ⅴ, p. 6.
(22) V.C.H., Vol. Ⅵ,
(23) V.C.H., Vol. Ⅱ, pp. 166—7.
(24) ドームズデイの《ヴイラニ》は経済的にはともかく、法的には《自由》といえなくはない。以後コモン・ローの発展とともに、法廷の保護をうけられるかどうかということが重要となり、これによって法律家は自由と非自由に分けた。この過程で全国的に配分が次第に平均化され、リンカーンシャーの自由人はあるものは非自由人におとされ、オックスフォードシャーの多くの農奴は自由となったのである。 Poole, Obligations of Society, chap. ii ; Stenton, Danelaw Charters, pp. lxxx—lxxxi.
(25) V.C.H., Vol., Ⅵ, p. 355.

(26) op. cit. ビスターで「マーケットで生活している」人びとはこの表には含まれていない。
(27) コスミンスキー（秦訳）、《一三世紀における賦役と貨幣地代》。

五

ドームズデイ・サーベイによっても、現在のウッドストックの位置に人びとが住んでいたかどうかは知ることができないのであるが、近辺にはいくつかの部落があったのであり、ここにハンティング・ロッヂがつくられ、王や側近がしばしばきて泊るようになったとき、町が発展する条件は十分にあったのである。町が王のイニシアティブで形成されたかどうかはともかく、町が王のハンティング・ロッヂの近辺に発達したということ、しかもこの発達には王たちのイニシアティブが十分にあったということ、このことは否定さるべくもない。町は、王のハンティング・ロッヂ、マナー・ハウス、「宮廷」のまわりに、まづ、王や王の従者や役人、ときとしては王の客に、必需品を供給する人びとが集まることによって《形成》されたのである。ヘンリー二世の治世にはとくにこうした人びとが必要となったにちがいない。彼は王領地のなかから、四〇エーカーの土地をさいて町の人々に与え、従者たちが宿泊できる宿屋を建てしめたのである。「ニュー・ウッドストック」の中心部はこうして――恐らく計画的に――つくられたにちがいない。そして王はまた毎週火曜日にマーケットを開く特権を町の人びとに与えたのである。また、町には、教区教会としてではなく、となりの村ブレイトンの教会のチャペルとしてではあったが、教会もこの時期に建てられたであろう。教会の南側の入口には、半円形のノーマン式ドアーが今も残っており、このことは、この時期に、現存の教会の建物の一部が既にあったことを推測せしめる。ヘンリー三世は、更に、聖マチウ祭に三月間フェアーを開くことを許した。

それは「この町が貧しいのを憐れんでのこと」(ハンドレッド・ロール)であったという。[1] 彼はまたマナー・ハウスを修理し拡大したし、町の建物をいくつか建てたとも云われる。ウッドストック郊外には、当時聖十字架(癩患者)病院、ウッドストック(婦人癩患者)病院等があった。これらは、いつ創設されたか明らかではないが、いづれも一二三〇年代に、ヘンリーによって種々の保護、便益を与えられている。[2] ヘンリー三世の時期には、教会も拡大された。現在も残っているタワーはこの時期のものであり、内部の柱頭には、ヘンリー三世の顔とおぼしき彫刻がきざまれている。こうして、町はヘンリー二世の時期からヘンリー三世の時期までにかなり発展し、町は町としての体裁をかなりよくととのえたにちがいない。

この時期には、近辺一帯も大いに様相を変えた。それは、産業の発展のためでもあったろう。近辺では、織物業は既に起っていた。オックスフォードには、ジョン王の時代には既に、六〇軒以上のはたおりがいたとされている。[3] ウイットニイ――ウインチエスターの司教のパレスがあった――では、既に一三世紀前半の時期に毛織物の生産がなされており、ヘンリー三世は、一二二一年、「ピーター・デ・ロッシェを訪れたときに、衣裳を二〇ポンドも」買入れたとされている。[4] 町の発達は、このように産業の発達による「自然の」発達でもあったろうが、ウッドストックのように王によって、また大領主によって、計画的につくられたからでもあった。バフォードの例はしばしば引用される。州西部のこの町は、ドームズデイの時期には普通の村落にすぎなかったが、グロースター・オナーの大領主フイッツ・ハモンがここの領地を手にいれるや、彼は村民に自由を与え、村を一気にバラーにしてしまったのである。「ペンの一書きによって、農奴たちは自分の財産を処分できる自由な権利をもつ町人となった」[5] のである。ウィットニーの東北、ウットン・ハンドレッド内のコグズの領主(前述)アーシックも、一二世紀末、コグズにバーゲッジを区画し、マーケットを与えて、このバロニーの本拠を村以上のものにしようとした。[6] 一二世紀半ばごろには城をつくったミド

ルトン・ストーニーの領主キャンヴィルも、アーシックにややおくれて同様の努力を払った。彼は、バーゲッジ（一二七九年のハンドレッド・ロールでは一四名のバーゲッジの所有者がいた）を区画し、一二〇一年にジョン王からマーケットを開く権利をえた。バーゲッジは領主に収入をもたらす。ミドルトン・ストーニーのバーゲッジ所有者は、一二七九年には、一人一シリング（一〇名）またはその半額（四人）を支払っていたし、マーケット法廷からは、一二九五―六年には三シル一〇ペンスの利益をえていた。[7] しかし領主がこうした努力をするのは収入のためばかりではなかったであろう。彼の本拠を村以上のものにすること、マナー・ハウスやパークをととのえること、これは領主たちが従うモデルとなりつつあったにちがいない。キャンヴィルは、ジョン王からマーケットの権利をえてから二年後には、ウッドストック・パークから一〇頭の牡鹿と四〇頭の牝鹿をゆずりうけたのである。

ミドルトン・ストーニーが年一度のフェアーの特権を与えられたのは、一二九四年である。これはウッドストックよりもかなりおそい。近辺でこの時期にマーケットやフェアーの特権を与えられたものをあげると、つぎの通りである。ビスターが、ロンジェスペの下に、王からマーケットの特権を与えられたのは一二三九年であった。フェアーの特権を与えられたのはミドルトン・ストーニーよりも早く一二五二年である（一二二六年以後は、二つのマナーの領主は同一人物である）。町は、バーゲッジで保有されてはいなかったが、それに近いものだったのであり、保有地は（聖職者やユダヤ人にはときとして禁ぜられたが）自由に売買でき、年額のレント以外に払う必要もなかった。年額のレントは一二ペンスであり、この時期に新たにつくられた町では普通の額であった。家も領主から与えられ、世襲することができたのである。[8] テイムもリンカーン司教によって計画的につくられた。その時期は――確実な資料によると、一二世紀末であるが――おそらく四〇年代であったとみられている。[9] 火曜日のマーケットの権利は、一二世紀の八〇年代に与えられたと思われるが、王の特許状を最初にえたのは一二一五年であった。後、バーゲッジがつくられ（一

三世紀の第二・四半世紀)、各バーゲッジは一シリングを支払った。もっとも、ある大工は三½のバーゲッジをもっていた。ほかに三つ分をもつもの一人、半分のもの一人、他は一バーゲッジであった。[10]

これらのマーケット・タウンは、一三世紀中に発達した。もっとも、ミドルトン・ストーニイにおけるキャンヴィルの努力はどれほどみのったかは疑問である。ドームズデイの時代の《人口》三七は、一二七九年にも四五にしかなっていない。この近辺に二倍以上にふくれ上った村が数多くあった――ミドルトン・ストーニイの属するプラウリー・ハンドレッドも《人口》は二倍になっているのであった――ことからすると、キャンヴィルの町づくりはあまり成功はしなかったように思われる。この町のバーゲッジ所有者は一四名であり、他に自由人が四名であって、ドームズデイ時代の《人口》が三七、一二七九年の非自由人が二七、この差一〇であることからすると、恐らく村に住んでいた多くの《ヴィラニー》は、そのままバーゲッジ所有者となり自由人となったのであろう。が、ここを除けば、マーケットをもつ村は、ドームズデイの時代以来かなり発達したにちがいない。とりわけウッドストックはそうであったにちがいない。

われわれは、この時期のウッドストックの状態を《ハンドレッド・ロールズ》によってかなりよく知ることができる。このサーベイによると、当時町には一三七軒の家があり、一〇八世帯が住んでいた。町の人びとは、王から与えられた土地や建物に対し賃貸料を払った。ハンドレッド・ロールによれば、最も多く支払っているものの額は、一八ペンスであり、最低の額は二ペンスであった。いく人かの人たちは現物で払っており、あるものは毎年一ポンド重の桂樹、王のチャペルに一つの燈火を納める等、であった。王に対して町の人々が払ったものはこれらの年々のレントのみであったろう。これは――新らしくできた町では――めづらしくないし、額も特別のものであるとは云いがたいであろう。サーベイによると町の人々にはつぎのような職業のものがいる。

金物商一名、染物屋一名、堅琴師一名、ナプキン作り一名、ひだつくり一名、紙屋一名、仕立屋一名、大工一名、なめし皮屋一名、細工師一名、かぢ屋一名、機織り一名、陶器師一名、呼売商人一名、その他パークで働く庭師や接待人多数である。

これをみると、町にはまだ、のちにかなり有名になる革手袋製造も金物製造もきざしは殆どみられず、とくべつの産業は全くなかったといってよい。しかし町は、毎週マーケットを開き年一度フェアーを開く特権を有していたので、近辺の市場の中心としてかなり重要な地位を占めていたろう。マーケットやフェアーは、この州では以上のべたものの外にバンプトン、ラドコート、スタンドレイク、ウィットニー、チャールベリー、バンベリーでもひらかれていたが、この町は、すでに特許状を授与されていたオックスフォードにつぎ、バフォードにおとらず重要な経済上の役割を果していたといってよかろう。一三世紀には、この町はすでにバラーとよばれており、バンベリ、チッピング・ノートン、デディントン、ヘンレイ、ウィットニイとともに、バラーとして州裁判所に代表を送っている。これらの町は、殆ど州北部にある町であることをここにつけ加えておこう。

この町は一三〇二年には議会に代表を送り始めた。この議会は一二九五年の《モデル・パーラメント》以来七年目のものである。一三〇二年の議会には英国全体で七四のバラーが代表を送ったと云われ、ウッドストックはその一つになったのである。[11] 同じ年に、この州からは、オックスフォード以外に、チッピング・ノートン及びデディントンが代表を送っている。とすれば、この年にはかなり小さいバラーも代表を送っていたことになるであろう。中世議会の研究家は、エドワード一世の時期に議会に代表を送ったバラーの数は、平均すれば、一議会で「八六を下らない」としている。[12] どのような町が議会に代表を送るように求められたかは、それほど明らかではない。となりのバッキンガムシャーでは、シェリフが通常それを決めたのであった。[13] この時期は議会制の《試行錯誤》の時期であり、どんな町を選ぶかの標準は定まっておらず、シェリフによって、また同じシェリフでも年によってちがったのである。代表を送

るようになった町がなんらかのいみで重要な町であったことは否定できないであろうが、戸数一〇〇前後のものもそのなかにはかなりあったのである。ちなみに、この州でエドワード一世の時代に議会に代表を送った町をみるとつぎのごとくである（オックスフォードを除く）。

チッピング・ノートン	一三〇〇年	一三〇二年	一三〇五年
ウッドストック		一三〇二年	一三〇五年
デディントン		一三〇二年	一三〇五年
ウィットニー			一三〇五年
バフォード			一三〇六年

ハンドレッド・ロールのなかで、ウッドストックはつぎのように述べられている。

「ウッドストック

「現在王が所有しているマナーの一つ。

「ウッドストックは王の手にあり、王位に属するエンシェント・デミーンである。

こうしてウッドストックは、エンシェント・デミーンであり、しかも以来王の手にある直領地である。また、ウッドストックは一三世紀には既にバラーと呼ばれており、従って王のバラーとして《ローヤル・バラー》と呼ばれている。

更にウッドストックは、いくつかの村落からなる王の領地、ウッドストック・マナーの中心でもあった。このウッ

ドストック・マナーは、七つの村からなっていたと思われる。たとえば、そのうちの一つでありバラーの隣にあるブレイドンは、《ハンドレッド・ロール》のなかで、つぎのように記載されている。

「ブレイドン

「先王たちの手にあったし、現在も王の手にあるマナーの一つ……

「ブレイドン・マナーは教会の僧職授与権とともに王の直領地に属し、ウッドストック・マナーの一部をなす。このマナーはエドワードの父王、ヘンリー三世によって、一〇年前のチャーターにおいて、王の事務官であったロンドンのジョンに、一代限りの期限であたえられた。地代は一五ポンド四ペンス半であり、イクスチェッカーに納められる。

ブレイドン・マナーは、前述したようにドームズデイ・ブックに記載されており、当時はバイヨーの司教の所領であったが、やがて王の直領地に編入されたのである。ブレイドン以外にウッドストック・マナーに属する村は、クム、ハンバラー、ストーンフィールド、ウットン、ホードリイであった。一五五一年、このマナーについて三名のコミッショナーによってなされた調書によると、各部落はつぎのような負担を負っていた。ブレイドン、クム、ハンバラーの借地人はパークの芝をかる負担、ホードリイ村のものは王がマナーにくるたびにマナー・ハウスを掃除する負担、クム村のものはトイレの掃除をする負担を負っていた。ただ一三世紀にこれらの村人がどのような負担を負っていたかは確認することができない。

ウッドストック・マナーには属しないが、同じくウットン・ハンドレッドの王領地に属するスタントン・ハーコートのスタントン・ハーコート家も、すでにヘンリー一世時代の当主以来、代々、ウッドストック・パークで王に「サージャンティイ」を負っていた。このサージャンティイの負担は中世紀中金納化されてはいない。ヘンリー三世の四二年（四月二日）の「調書（インクイジティオ）」には、つぎのような記載がある。(14)

……四三ポンドの土地を王からうけて保有し、(三分の一の)……ナイト・サービスと、スタントンで……年々……一六ペンス半の……を支払わねばならぬ。彼はまた、ウッドストックで王の牧草を運搬し、ウッドストック・パークの「oran(?)」と灌木をかりとらねばならぬ。

エドワード一世の二一年(四月一二日)の「調書」にも、ハーコート家のある当主について、彼がスタントンの王領地を保有する代償として一人分のナイト・フィー以外に、ウッドストック・パークでの諸負担を負っていることが記されている。上述の一五五一年のコミッショナーによる調書においては、彼の負担は、冬雪が降ったときに、二日おきに鹿に草を与えるために四人のものを用意しなければならないこと、王の代官が彼のマナーにいったときには、パンとチーズ、一ガロンのエイルを供しなければならないこと、とされている。

ウッドストック・マナーには、管理人 Keeper of the manor of Woodstock がいてこれを管理していたであろう。少くともこのマナーが女王に与えられていたときには彼は、ハンドレッドのベイリフ以外の人物であったろう。同じくウットン・ハンドレッドに属してはいるが、王領ではないグリンプトンの領主は、グリンプトンの領地内の一ヴィレーンが王領内のウットンに逃亡しているのを知って、彼の返還を求めて手紙を書いてあてたのは、ウッドストック・マナーのキーパーに対してであった。(16)

《his most honorable, most gracious, and most lawful Master Monsieur Philp de la Vache, Keeper of the manor of Woodstock》

彼はキーパーであるベイチにつぎのような手紙を送っている。

トマス・セント・ジョーンズはつぎのことをお願いしたく存じます。トマスのヴィレーンでグリンプトン領に属しておりますトマ

ス・ホーキンスなるもの、ウッドストック王領地内のウットンに住んでおります。トマス・セント・ジョーンズがこのヴィレーンを法と理性に従ってうけ取れるよう命じ下されば幸いと存じます。

神と慈悲とのために。

キーパーの地位は豪族クラスのものではなかったろうが、卑しからざるものであったにちがいない。ド・ラ・ヴェイチは、王のハウスホルドの騎士の一人であり（一三九六年ベックリーの領地を王から与えられた）、また、ヘンリー四世治下では、女王の出納官として仕えた人物である。[16] 彼と同じ一門に属したと思われるリチャードは、一三六〇年ウインザー城の警備長官に任ぜられており、彼も Knight of chamber であった。[17]

ウィッチウッドの森は中央政府の独立の管轄下にあり、森のベイリフ、キーパー、森林官 Forester（のちにはranger）が森を管理し、森林法違反者を裁判したであろう。一三世紀には、森林官には近辺にすむド・ラングリー家のものがなった（父のトマスは森林官として《悪名高い》人物であった）。[18] ウッドストックはウイッチウッドの森に隣接していたので、関係の役人はウッドストックに役所をもっていたにちがいない。

ウッドストック王領地は、王のマナー・ハウス及びパークの所在地であり、またウィッチウッドの森に隣接しその管理官、警護官の居住地として、近辺の、おそらくは北オックスフォードシャーの王領地の中心的な存在であったにちがいない。恐らくこれらの王領地からあがる収入はここに集められ、そのうちのある部分はここから国庫に運ばれたであろう。バフォードに近いグロースタシャーの一部落バリントン内にある王領地のレントさえも、一二世紀以来ウッドストックで支払われていたと記されている。[19] 州西部の王領地ラングトン（バンブトン・ハンドレッド）の自由人も、ヘンリー一世の時代以来、王の物産の運搬をここからサザンプトンまで護衛する負担を負わされていた。[20] 州のファームも、しばしばここでシェリフの納入官によって集められたにちがいない。[21] また町にいる王の役人は、王の必

要のため、少くともオックスフォードシャー全体にわたり物品の（強制）買上げをとり仕切ってもいる。一四世紀前半に南オックスフォードシャーで、王の役人による食糧の強制買上げがしばしばまたときとしてかなり大量に行なわれた。部落にとってこの買いあげは迷惑であったと思われ[22]、部落は自分の部落であまり多くの買上げがなされないようにと、王の役人のところに代表を送って交渉せしめている。例えば、カクサム村――マートン・カレッヂ所領――は、一三四三年―四年に交渉のため代表を送ったと記されている。彼らがいったのは、ウッドストック（及びバーカムステッド）の役人のもとにであった。この村は、また、王がウッドストックにきたとき、近辺のヘンレイからそこまで食料品やワインを運搬する負担をも負わされている。

ウッドストックは一二世紀末頃には、ウットン・ハンドレッドの中心、ハンドレッド・ベイリフの所在地となったであろう。

警察や民兵組織において、ハンドレッドの位置は、一般に、一三世紀以来極めて重要なものとなった[23]。ヴィレーンも、決定的に、自由人と同様に州の警察や民兵組織の一環を荷うようになったヘンリー三世の時代にはとくにそうであったように思われる。各部落は、それぞれ警察や民兵組織（とくに前者）をもつようになり、村のコンスタブルがこの任にあてられた。ハンドレッドの段階において、警察や民兵組織には、ハンドレッドのハイ・コンスタブルが当り、一般にハンドレッド・ベイリフはこれに関与しなかった。このハイ・コンスタブルは、ハンドレッドの平和と防衛に向けられる人びとのリストと武器のリストをととのえる義務を負うようになったのである。エドワード一世の時代には――一二八五年のウィンチェスターの法例によって――、彼は、年二回この組織と武器を査察する義務を加えられたのである[24]。こうした役に任ずるハイ・コンスタブルはウッドストックに住んだにちがいない。しかし、このウ

ットン・ハンドレッドでは、この役には、ローヤル・マナーのキーパーが当ったのかもしれない。一二四一年（ヘンリー三世の二五年）には、ウットン・ハンドレッドの歩兵隊は、燕尾旗を先頭に立てて王の召集に応じている。燕尾旗をもったのは――サージャンティによって土地を所有する――サージャントであった。もっとも一二七五年までには、このサージャンティは金納化されている。[25]

ウッドストックにはローヤル・バラーとして王のベイリフがローヤル・パーク及びローヤル・マナーとして王のベイリフないしキーパーがいたであろう。[26] ウットン・ハンドレッドの中心として、ここにはハンドレッドのベイリフがまた、バラーのコンスタブルだけではなく、ハンドレッドのハイ・コンスタブルもいたであろう。ハンドレッド・コートの事務官もほかにいたにちがいない。また、ウィッチウッドの森のベイリフ、キーパー、森林官 forester のちには ranger）がここに役所をもっていたであろう。これらの官職は、理論的にいえば、明確に区別されるべきものである。事実一、二の職を除けば、同一人物が兼職することはなかったであろう。森林官、コンスタブル、ハイ・コンスタブル等はそれぞれ独立し、同一の人物が兼ねることはなかったろうし、彼らが、バラーのベイリフや、マナー、パークのベイリフ、キーパーになることもなかったであろう。しかし、バラーのベイリフや、マナー、パークのベイリフ、キーパーはあるいは兼職があったかもしれない。しかし、そのことを明らかにする資料はみつからないので確かなことは云えない。ただ、マナーとパークのキーパーないしベイリフが同一人物であることが多かったことはいえるであろう。彼がバラーのベイリフにもなかったかどうかは極めて疑問である。ハンドレッド・ベイリフについても同様である。ウットン・ハンドレッドは、王のハンドレッドであり、パークやマナーのベイリフがハンドレッドのベイリフになったということは十分に考えられるのであるが。

(1) 実際、中世ではウェストミンスターの人々でさえもゆたかではなかったのである。彼らは一三九九年から一三九八年宮廷がヨークに移ったとき、家財をもって町からでてゆき、ヨークに住んだ。そのため町は年七〇ポンドの税収を失った。つまり宮廷の人々と関係をもつ人々からあがる税が七〇ポンド前後であるということであり、「宮廷がここにあったときさえ、たいしたことがなかったことを示す」ものである（Tout, op. cit.）。

(2) V.C.H., Vol. Ⅱ, p. 160.

(3) E. Lipson, Econ. Hist. of England, Middle Ages, p. 397 ; V.C.H., Vol. Ⅱ, pp. 242—3. 253.

(4) V.C.H., Vol. Ⅱ, p. 240.

(5) J. Tait, Medieval English Borough, pp. 83. ff ; Poole, op. cit., p. 66.

(6) Sir Chris. Hatton's Bk. of Seals, ed. L.C. Loyd. and Doris M. Stenton, p. 78 ; V.C.H., Vol. Ⅵ, p. 247.

(7) V.C.H., Vol. Ⅵ, p. 247.

(8) V.C.H., Vol. Ⅵ., p. 32.

(9) V.C.H., Vol. Ⅶ, p. 178.

(10) op. cit.

(11) Maitland, Memoranda de Parliamento 1305. ; McKisack, The Parliamentary Representation of the English Boroughs during the Middle Age.

(12) op. cit.

(13) op. cit. なお、チャンピング・ノートン、ウィットニー、ベフォードは当時王のベラーではなかった。一三〇六年議会以前にも王のベラーではないベラーも代表を送っているのである。

(14) Inquisitio post Mortem,

(15) Barnett, op. cit., pp. 10—11.

(16) V.C.H., Vol. V. p. 62.

(17) Tout, Chapters in the Administrative History of Medieval England, ii, p. 171 ; Cal. of Fine Rolls, 1356—1368, p. 125; Shelagh Bond, The Medieval Constables of Windsor Castle, E.H.R., No. CCCXXlll, Apr. 1969.

(19) Bk. of Fees, i. 107., V.C.H of Gloucester, Vol. M, p. 19.　一三世紀前半には広い範囲に亘る王領地の管理をつかさどるウォーデンの職が設けられもした。
(20) Barrow, Feudal England, p. 340.
(21) Cam, op. cit., p. 88.
(22) P.D.A. Harvey, A Medieval Oxfordshire Village, Cuxham, 1240 to 1400, p. 111.　著者によれば、強制買上げは一三〇一—二年までについては全く記載がなく、一三二〇—一年まではまれであったが、以後、次第に規則的にまた大量になり、一三四〇年代後期にもっともひんぱんになった。一三五〇年以後は記載が全くなくなっている。買い上げられる量はしばしば極めて大量であり、一三四四—五年にかけては村から売られた穀物の四分の三ほど（八四qr. 六bus. の小麦、七qr. のカラル、一〇qr. 五 bus. のからす麦）にもなっている。村落の人が強制買上げを嫌った理由は価格の点ではなくて、契符によって支払われたからであり、村びとたちがこれを現金にかえるにはある場所——権門領の役人——までゆかなければならなかったからである。
(23) Cam, The Hundred and The Hundredal Rolls, pp. 188—.
(24) Cam, op. cit., p. 189.
(25) Book of Fees, pp. 253 (1219), 1172 (1250).
(26) 一三世紀半ばには、王領地の管理はシェリフの手から引はなされ、王領地自体の役人によってなされるようになった。

六

ヘンリー二世の治世以来官庁は次第にウェストミンスターに固定されるようになり、[1] また一三世紀以来発達した議会もますますウェストミンスターで開かれるようになった。巡回する王とともにあったコートの所在地の一つとして果してきたウッドストックの役割は、こうして次第に失なわれていった。しかしながら、国の政治とは切り離されつ

つあったウッドストックも、王の狩猟場として、また王族の居所・別荘地として、なお愛されつづけたのである。エドワード一世の二人の子供はここで生れた。一人は、義兄のエドワード二世が殺害された直後同じくモーティマーによって殺害されたウッドストックのエドモンドである。[2] エドワード三世の妃もこのマナーを愛し、皇太子をここで生んだのである。[3] マナーが王妃に与えられるようになったのは、この時期からであり、ウッドストックは王の家族たちの別荘地として最も華やかな歴史をもったといえよう。エドワード三世の妃はこのマナーを与えられたし、ヘンリー四世の妃もこのマナーを与えられた。州南部のユーエルムに住むチョーサー家一門のものが、ウッドストック・マナー――これ以外にも彼女から領地をかりている――を借りたのもこの王妃からであった。彼は、今も残っている《チョウサーズ・コテージ》に住んだといわれている。彼は王妃に年々一三〇ポンドを支払ったが、王妃から借りたマナーのうち、ここのマナーが最も重要であった。[4]

一四世紀、百年戦争がはじまったとき、この州からも数多くの軍隊が出征した。一三三九年には、重武装の軍人二〇名、軽武装のもの八〇名、弓隊八〇名がでかけたし、[5] 一三四六年には、クレシーの戦いのために、二名の旗手（ハンスロープのジョンと、コーンウォールのエドモンド）、騎士一三名、エスクワイヤー一一名がでかけた。騎士一三名のうちには、J・ゴラファー、ウイリアム及びリチャード・ハーコート、セント・ジョーンズ、T・ヴァーノン、R・コーンウォールが含まれている。[6] 一四世紀末から一五世紀にかけては、ラヴェル家、チョーサー家さらにド・ラ・ポール家が抬頭し、地方的人物以上のものを送った。[7] この州においても、有力な一家は、ランカスター家とヨーク家に分れたが、ランカスター公領及びコーンウォール公領が広く存在しているということによって、ランカスター派が優勢を占めた。ド・ヴェーア、ラベル、ド・ラ・ポールいづれもランカスター派であった。

Oxon の deserted villages（第Ⅸ表）

desert された時期	確実なもの	推定されたもの	
ドームズディにしかあげられていないもの	1	0	
1100 ～ 1350	5	3	
1350 ～ 1450	8	17	11
1450 ～ 1700	23	17	
1700年以後	3	0	
計	40	48	
明らかでないもの		13	
計		101	

オックスフォードシャーは、一四世紀の始めには、英国で最も豊かな州の一つであるといわれている。[8] しかし、黒死病はこの州をも激しく襲った。エンシャム近辺のテイルガズリーでは一三四九年以来一人もここに住んでいないと、一三五九年に報告されている。[9] ハンドレッド・ロールにはここに五〇人の小作人がいたとされているにもかかわらずである。州の中部にあるウッド・イートンには黒死病まんえんの直後には二人の小作人しかいなくなったとされているし、[10] 州北東部のタズモアーでは一三五四年と一三五八年に税金は完全に免除されている[11]（この三つの部落は以後消滅してしまった）。

人口の減少は勿論、黒死病のためばかりではなく（事実、一四世紀末にはグリンプトン・マナーの農奴は――前述のごとく――隣村のウットンに逃げていた）、すでに黒死病以前に人口は減少していたと思われる。英国全体の人口は一四世紀はじめにピークに達し、それ以後は減少し始めていると考えられるふしがある。[12] ウッドストック西方のリーフィールドのラングリー村（チャドリントン・ハンドレッド内にあり、ウィッチウッドの森のなかに介在していたと思われる）には、一二七九年には

一八人の小作人がいたが、一三一六年にはすでに四人の小作人しかいない。山林のなかのこの村はいちはやく人口の減少をみているのである。[13] ウットン・ハンドレッド内のヘイスロープでも、一三一六年には小作人は三人となってしまった。[14] 人口のこうした縮少は租税を払う人びとの減少によってもたしかめられる。

すでにこの時期に deserted village がでている。一三五〇年から一四五〇年までの百年間に、放棄された村落は、放棄されたと推量できるものを含めると、二五ないし三六と極めて多い。[15] もっとも、それ以前にもすでに八つの村が放棄されていると思われるのである。放棄までにいたらない村も、その人口は著るしく収縮しているであろう。少くとも、著るしく収縮した村は極めて広範にあったであろう。

第Ⅸ表でわかるように、一四世紀半ばから一五世紀半ばまで村の放棄は極めて著るしいのであった。これは、黒死病による村の人口の著るしい収縮が重大なきっかけになったにちがいない。しかし、黒死病によって促進されたにせよ、領主経営における労働力の需要と供給のアンバランス、労働力不足、小作料やレント、賃銀の高騰等の要因によって、大きな人口の移動がおこったにちがいない。一五世紀には、労働者条例の制限があったにもかかわらず、またそれ以前にも、人口移動は極めて激しくなっていたように思われる。黒死病ののち、エインシャム僧院の上記領地ウッド・イートンでは、二人の小作人しか残らなかったが、二人とも――新たに移住してきたものも加えて――もし有利な小作の条件が与えられなければ、去ってしまうと云ったとされている。[16] 一四世紀後半には、賃銀は疑いもなく上昇している。たとえば、ビスター僧院で雇用されていた大工の賃銀をみると、一三二七年には、週八ペンスから一シル二ペンス、日に一ペニー半から二ペンスであったが、一三七七年には、日に五ペンスとなった。[17] こうしたことは、領地経営が賃労働に頼らざるをえなくなっていること、また労働を確保することのむづかしさを示しているといってよいであろうが、さらにまた人口移動が激しくなり、賃銀を引きあげなければ労働力を捕捉しえなくなっていることをも

示しているのである。

たしかに、一四世紀後半にも、この州の領主たちは、《ダイ・ハード》であり特権をなかなか放棄しなかったように思える。少くともエインシャム僧院やセント・フライズワイド僧院はそうであった。アストンでは、ある農奴は、五シルのレント及び三シル九ペンスとしか評価できない賦役を、年一二シルでコミュートするほかはなかったのである。[18] 僧院では、古くからの賦役はあまりコミュートされずに残っており、ハンドレッド・ロールに記載されている賦役を削りとるには僧院は非常に慎重な態度をとったにちがいない。一三八一年の農民一撥のリコードは、現在までのところ、オックスフォードについてしかみつかっていない。しかし、一七年後の一三九八年には、この州にも重大な暴動があった。その中心は西部のバンプトンであり、参加したものは、主として、バンプトン、ウィットニー、エインシャム等、州西部に住む人たちであった。この地区の人たちはオックスフォードシャーの歴史全体を通じて反抗的だったのである。[19] ウッドストックの北どなりグリンプトンの農奴が逃亡したのもこの頃であった。

一四世紀の末から一五世紀にかけて、領主制は崩れつつあった。借地契約は、一三世紀にもあったが、一四世紀には極めてひんぱんになった。黒死病ののち、領主たちは直領地経営を古くからのやり方で維持しようとしたのであったが、大僧院を除けば、賦役は消滅し、賃労働によって取ってかわられていた。一三五〇年から一四五〇年までに、農奴制は、農奴が逃げ去ったのでなければ、賃労働者になったか、牧羊経営のために耕地が牧草地に変えられたかして、消え去ってしまったのである。古い領主制に、成功した農民やジェントリーの農地経営がかわりつつあったのである。事実、牧羊はすでに始まっており、オックスフォードシャーの羊毛は、英国で最も良質の部類に属するともされている。[20] 一五世紀にはコッツウォルド牧羊は最全盛期を迎えた。北部コッツウォルドの羊毛産地は、多くはグロースターシャーにあり、集散地はキャムデンやストウやウインチクムであったが、バフォードやチッピング・ノートン

も集散地としての機能を十分に果していた。一四五一年以前に、チッピング・ノートンには、大きな羊毛商がいたとされており、[21] またウィットニーでは、すでに一四世紀以来、有名となった毛布製造がはじめられていた。

黒死病で打撃をうけたウッドストック・バラーも、一五世紀前半には急速にもりかえしたように思われる。おそくとも一五世紀前半には、町は独立の都市としての組織をもっていたにちがいない。というのは、この町は、一四五三年に、自治体として正式に認められたが、そのチャーターの前文には、このチャーター以前にも「バラーは種々の特権、自由の慣習をもっていたが、バラーの人びとはこのことによって、それらを安定して確保できるようになる」と信じたからであるとされているのである。[21] バラーは、「リバティ」と「特権」を既に以前から与えられてもっていたのであり、それらはすでに慣習となっていたのである。

ウッドストックが「インコーポレイト」された時期は、英国における「インコーポレーション」の波の第二波にあたる。一般に、インコーポレイトされる場合には、つぎのような事項がチャーターによって保障される。㈠永続的に継承されて行くものであること、㈡バラーが全体としてバラーの名において訴訟をおこしたり、訴訟の被告になりうること、㈢土地を保有することができること、㈣印章をもつこと、㈤条例をつくりうること、この五つである。[22] エドワード一世の時代にはすでに、大きなバラーは、こうした属性や権利をもつオソリティとなっていた。従って、インコーポレーションのチャーターも、事実上すでにそうなっているバラーを、チャーターによって法的に確認することであったと云ってもよいのである。さらに、インコーポレーションによって、バラーはしばしば《カウンティ》の地位を与えられている。これによってバラーは州の官吏がバラーにくるのを排斥することができ、バラーは広範な権利をもつことになるのである。こうしたインコーポレーションの第一波は、一三七三年のブリストルに始まり、一四〇九

年のリンカーンのそれで終り、第二波は、一四三九年のプリマスのインコーポレーションに始まる。[23] ウッドストックのインコーポレーションは一四五三年である。この小さなバラーは、五つの一般的な条項以外に、《カウンティ》としての地位を認められ、かつそのほかいくつかの特権を与えられたのである。これは、おそらくこのバラーがローヤル・バラーという伝統を背景にもち、いまも王族が愛する別荘地であったという事情によるであろう。チャーターには、バラーがウインザーと同じような《リバティ》をもつと、記されているのである。ウインザーはこのバラーのインコーポレーションの前例とされたのであって、二つのバラーは、大きさもそれほどちがっていなかったし、二つとも、王や王族がしばしば訪れる別荘地に隣接していたのである。

すでにのべた前文につづいて、チャーターにはつぎのような趣旨の条項が記されている。

(一) バラーに現に住むもの及びその子孫は自由な市民になるということ。

(二) 新しい団体は、The Mayor and Commonalty of the Borough of New Woodstock の名を与えられ、訴訟の原告及び被告になりえること。

(三) プールを含めて、王が所有していたものはすべてバラーに与えられ、王の家屋からあがるレントはバラーに収められること。

(四) バラーは印章をもつことができるということ。

(五) 食料品、飲物等の質、価格などについての規則を定め、これを強制しえ、一年のうちのいく日かフェアーをたてることができるということ。

(六) 町長及び Sergeant-at-Mace はフリーメンによって選ばれるということ。

(七) バラーは独自の法廷をもちえ、シェリフ、州裁判官、王の官吏はバラーの自由な行政に介入することができない

し、これまで王に収められていた罰金、没収品等々はすべてバラーが収納するということ。

(八) マーチャント・ギルドをもちうること。

(九) 永久に議会に代表を送る必要はなく、その「義務から免除される」ということ。

こうしてこの小さいバラーは、コーポレーションの地位をえるとともに、カウンティの地位を獲得した。そして、バラーはこのミクロの社会のなかで強大な権限をもったのである。チャーターによってバラーはギルド・マーチャントをもち、食料品、飲物等の質、価格などについての規則を定めこれを強制しうる権能を与えられている。この条項の「目的」は、第一に、マーケットの監督によって、適切な価格での食料の供給を確保することであり、第二に、生産物の一定の質を強制し消費者の利益を保護すること、商人の間での独占、賃銀労働者の間での集団的取引を抑制すること、仲買の利得の率をコントロールすることである、といわれている。しかし、こうした「目的」も、ギルドやコーポレーションのオリガーキーが利己的な権力を振えば、かえって抑圧のカモフラージとなろう。また、この小さいバラーでは、二名の下院議員をウェストミンスターまで送り出すことは、大変な負担となっていたであろう。この時期には、バラーで選ばれる議員は、すでにバラーの人間ではなく、ジェントリーになりつつあったのであり、バラーの人たちは、下院議員になろうという野心などは余りもたなかったのである。このバラーにとっては、議会に議員を送り出す「義務」から解放されることは、特権と感じられたのであろう。王や州の官吏からの干渉をしりぞけ独立をかちとろうとしたこのバラーは、下院議員を送り出す「義務」を免除されることによって、国の政治からも「解放」され、切り離されてしまい、ミクロ・コスモスのなかに閉じこもることになってしまったのである。

(1) 前注参照。

(2) モーティマーもエドワード二世の未亡人とともにここに住んだことがあるという。

(3) 皇太子が生まれたといわれる家が今も残っている。

(4) オックスフォードのチューサー家は、有名なチューサーの一門ではあるが、ウッドストックに住んだチューサーは彼ではない。

(5) V.C.H., Vol. Ⅰ, p. 443.

(6) op. cit,; Cal. Pat. 1377—81, p. 39 ; 1429—36, p. 521.

(7) V.C.H., Vol. Ⅰ, p. 443 ; Jacob, op. cit., pp. 7—8, 327 ラベル家については Gentleman's Magazine, 1820.

(8) T・ロジャーズによれば一三四一年の頃、オックスフォードシャーは、ノーフォーク、ミドルセックスとともに、最もゆたかな州であるとされている。 T. Rogers, Hist. of Agric. and Prices, i, 110 ; V.C.H., Vol. Ⅱ, p. 177.

(9) Eynsham Cartulary, ii, p. 69 ; M. Beresford, The Lost Villages, pp. 159—160.

(10) Eynsham Cartulary, p. 19.

(11) Allison, etc., op. cit., p. 45.

(12) op. cit., p. 5.

(13) op. cit., pp. 5—6.

(14) op. cit., p. 6.

(15) op. cit., p. 22.

(16) Eynsham Cartulary, p. 19.

(17) V.C.H., Vol. Ⅱ, p. 181.

(18) op. cit., p. 179.

(19) op. cit.

(20) Cunningham, Growth of Engl. Ind. and Com. i, App. D. 一三四三年羊毛の最低価格が議会で決められたとき、オックスフォードシャーの羊毛は、良質のものを産する五つの州に含められた。 Rot. Parl. ii, 119. No. 10.

(21) V.C.H., Vol. Ⅱ, p. 244.

(22) M. Weinbaum, The Incorporation of Boroughs ; British Borough Charters, Vol. Ⅲ ; Jacob, The Fifteenth Century,

pp. 393—4.

(23) Weinbaum, The Incorporation of Boroughs.